

大谷學報 第十一卷 第二號

漢藏對照百字論及び譯註

山口益

一、緒言 百字論の著者——百字論本文の形式——百字論と百字論と四百論とに就いて

二、漢藏對照 百字論本文及び譯註

三、漢藏對照 百字論註及び譯註

一、緒言

百字論については曩に椎尾辨匡氏の所論に依りて¹⁾字井伯壽氏の之を論せられたるものあり、後に²⁾山田龍城氏の此に關說せられたるあり、本稿は纔に漢藏對照する所によりて百字論の内容を少しく鮮明に了解し得たるかの預細な努力に過ぎぬ。

一、西藏譯百字論は山田龍城氏によりて謂はるゝ如く漢譯よりもずつと後代に譯せられたのであつ

てその原典的價値は低いものでもあらうが、全體として後に示す對照及び譯註の示す如く百字論の内容を漢譯よりも明瞭に了解せしむるの便を有する。今西藏譯本を底本としつゝ、百字論を内容的に分節して見ると後に示す如く百字論は二十一節の本文と終に出でたる結びの偈とから成立すると見らるゝ。長行釋の助けに由る理解とは言へその第十一節以後の内容は百論破神品以後の各品に見らるゝところと處々相一致し、又その相一致する各項の次第順序は百論破神品以後の各品の次第順序に相副ふ如く見ゆるものあり、以て百字論は内容的に見て一部分百論の要略書と見らるゝから此は固より提婆に歸すべきであり、西藏譯が偈も釋文をも共に龍樹に歸せることは以て信するに足らぬ。その所傳の後代に屬するとは言へ内容より見て漢譯よりも整ふた體裁を具へる西藏譯には、學者が以て此百字論の註釋が提婆にあらすと判せんとする依處なる漢譯百字論の「我今歸依聰叡師、厥名提婆有大智」云々一行の歸敬頌がないから、此歸敬頌有るによりて註釋文が提婆の撰にあらすとする價値は多少薄らぐことゝならないであらうか。その他にこの註釋が提婆の作にあらすとする論據はないやうである。後にも注意する如く第十八節終りの引用經文は、楞伽經等に見ゆる思想であつて、註釋者がそれを引用せることは可成後代のものたることを證せないでもないが、併しそれと同様の思想が四百論第三五〇偈即ち破邊執品の終に見えることであるから、此を以てしても註釋者が提婆に非ることを證するには足りない。

二、註釋を合しての百字論は先にも云ふ如く二十一節よりなり、多くの論部聖典に見らるゝ如く各節とも外人の難問を以て始まり、それに答ふるに論文の「偈」——漢譯に従へば偈であり、普通の形で云つても偈句たるべきであるが、後に云ふ理由によりてこゝには「本文」と言ひ度い——を以てし、その本文の註釋が此に續くのである。而して長行釋中漢譯者はその答としての本文を、漢譯者によればそれは明かに偈であるから別行に示さるべきに爾かなさゞりしは、特異なる意趣のありしによるとするも、漢譯中その論主の答としての偈が長行釋中に少くともその跡を辿れるやうな形として殘されて居るのは、完全態としては各節一句宛即ち二十一句なければならぬところを約半数なる十二個處に於てしか見出されない。その見出されたる十二句を卷末に上げられたる五字一句、四句一行の偈、五行即ち椎尾辨匠氏が百字論の本偈として認められたるものと比較するに、後の對照譯註にも見ゆるであらう如く、その長行中に見出さるゝ方の一々の句は所謂百字論の偈句の内容と必ずしも一でないものがある。此によりても漢譯者の原本が頗る内容の整つてないものであることが知らるゝ。所詮吾人の大小乘論書漢藏對照研究の貧弱なる經驗より見て、此百字論の如きは藏譯と漢譯との間に相當著るしき原典上の差異の認めらるゝものであると云はねばならぬ。所謂百字論の偈と稱せらるゝ本文の形に就いても、漢譯にてはそれに先行する「大人平等相、心無有染著」云々の偈と同形に示され而して西藏譯による限りその先行する偈は三三 *alagara* 四句一行の *Stoka* な

りしを知らるゝのであるが、百字論の本文として見らるゝものゝ西藏譯に於ては通常梵頌が西藏譯に於て見らるゝやうな偈形らしきものが何等認められぬ。是れ西藏譯の題號が單に *al-gara Sataka* *ii-ye brya-pa* として示され、普通の他の論偈に見ゆる如く *Karika=shig Jelur byas-pa* の語の付せられてない所以であらう。此に由りて西藏譯に従へば、百字論の本文は漢譯に見ゆる如く五字一句、四句一行の偈、五行なるが故に「百字論」とは暫らく云ひ切れないことになり、私の試みた極めて不十分なる還元ではあるが、後の偈の譯の一行に示す如く、西藏譯の各一句は梵語に於ては略五字 (*al-gara*) より成り、かゝる句が各節に一句宛即ち二十一句あることになるから、此に由りて大體此論が百字論と稱せらるゝ所以が明瞭になることと思ふ。

三、先に吾人は百字論が一部分百論とその内容に於て一致するものあり、その部分の次第位置が百論各品のそれを要略的に示すものと見た。即ち極めて要畧的ではあるが百字論の第十節に我を破する處より第十八節に常物を破するの次第は正に百論の破神品より破常品に至るまでの各品と所論の次第傾向を等しくし、而して百字論にてはかく諸法を有自性と執するの見を遮遣し畢りて、次に第十九節に於て諸法は有爲も無爲も「夢と等し」として中論觀有爲相品の結論従つてそれが空七十論に表はさるゝ如き諸法皆空夢、幻、陽焰、乾闥婆城に似たりとの思想を高潮し、終に第二十、二十一の兩節に於て諸法皆空無自性であるけれども有自性を遮遣する空教學の教法は可能である、否、名

言 (denomination) が空なればこそ教法が可能であるとする龍樹の廻諍論所出の思想を述べて居るが、此最後の節の所論は言ふまでもなく百論破空品のそれである。而して今四百觀論の後分即ち漢譯所傳の廣百論なる部分に就いて此を云何と見るに、既に宇井伯壽氏も此に論及せられたるが如く、各品の次第は多少百論のそれと前後するものあるにせよ、此兩者亦その内容を殆ど同じくし、四百論の最後章即ち教誡弟子品は百論の破空品、從つて百字論の第二十、第二十一兩節と所論の意趣内容に於て同じきものあるを認むる。此の提婆選述の三論書が殊にその終の部分に於て一致して居ると云ふことは三論書ともかくの如き所論の下に論が完結して居ることを意味し、提婆の中觀教學が此等三論書の所述の如きものである限り、これらの論書にはその最後品以下に餘分の章節のあつたことの考へられる餘地がない。此を更に四百論各品の内容に就いて考へて見るに、月稱註⁵⁾による限り四百論の前半八品は後半所論の諸法無自性の教法を受け得るに至る爲の準備的教説であり、そこには常樂淨我の四顛倒見を破し(初四品)、四顛倒を離れることは菩薩行によりて得らるゝとなして有情利益の菩薩行を説示し(第五品)、その菩薩行の障礙たる煩惱の斷を説き(第六品)、次に煩惱の増長する境たる輪廻の過失を述べて輪廻の厭離すべきを明かし、その厭離の爲の行業について行業の眞價が無自性空にあることを談じ(第七品)、如上の道を経て空教學を解了するに至れる者の、愈後半所述の空無自性教に入らんが爲の入門、preparation として淨修弟子品第八の設けられたるものなるが、

特に第五章及び第七章等菩薩の行業が説示せられたる場合、その行業とは第五品に於ては、勝善の果あるものなれども生老死等の苦を成せしむる故に勝善にあらず。勝善に非る此等二業が心に自在を得たる菩薩にとりては勝善となり、生有る者の輪廻を止滅する因として存す」と述べられ、第七章に於ては「如意なる境が善業によりて得らるゝも解脱を希ふ人々は不淨もて塗られたる家の如くそれを難ず。義に非るものゝ根本なるが故に、常樂淨我によりて常に害せらるゝが故に又貪等の煩惱を生せしむるによりて不放逸の住處なるが故に、捨つることの寧ろ勝れたる如きものは成就せらるゝとも何の要がある。故にかゝる果なる境の因なる法を聚むることに疲れ果つるは無意味なるにより、非法の如く法に對しても執着を捨てよ」と説く如き、罪過よりも寧ろ善業福報を捨てることを高調する數偈を見出すものである。かくの如くであるから四百論前八品中始め七章はその内容より見て一方或は常樂淨我の顛倒、三毒の煩惱、厭離すべき有なる罪過の捨すべきを説くと共に他方菩薩の行業としては善不善共に此を批判する空智見の波羅蜜に歸せしめ、以て第八章なる無自性空説示の入門へと向ふものであるから、此が百論の第一品捨罪福品に要略せられたるものと見ることは敢えて不當でなからう。

かくの如く百論はその結末に於て四百論並びに百字論が結末さるゝ次第とその内容を同じくし、

その第一品捨罪福品が極めて簡單なるにせよ四百論の前八品の所論の意趣と同じとすれば、ともかく百論は現在の形に於て首尾完徹して四百論の綱要書と認め得るものであり、よりて以て私は宇井伯壽氏が既に疑問せられたる如く僧肇の百論序に「論凡二十品、品各五偈、後十品其人以爲無益此土、故闕而不傳」と云へる所傳に對しては、愈以て記載せる事實の異なる點に訝らざるを得ないものがある。蓋し、若し百論が四百論の思想より以外のものを述べたりしものならばいざ知らず、直接には四百論よりも百論の更に要略書とも見らるべき百字論が百論の結末を以てその自らの結末とせる處によりて見るも、百論の破空品以後に更に十品の存したりしとは到底考へ得べき性質のものでない。若し此土に益無しとして傳はらざるものを強いて求めんとならば、それは破神品以後の諸品が四百論の後半をかなり詳細に要略せるに反し、前半は無自性空なる中觀教學の直接にして組織的なる説示に非る故に中觀教學理解の上に直接の益無しとして單に捨罪福の一品のみによつて要略せられたるそのことではなければならぬ。此れ百論の註釋者吉藏がまた此土に闕而不傳が寧ろ前半なりしに、非るかど疑ても見、又百論を分科するにともかく捨罪福品と後九品とを二分に大別したることのあるその所以でもないであらうか。宇井伯壽氏が漢譯佛典中の所傳によりて四百論は前後二分して後分が廣百論として別行せられ居たる旨論證せられたる如く、私は又その四百論前後二分別行流布の事實を月稱の四百論註に月稱の語として見出したのであるが、かく四百論が前後二分され、後半が重んぜ

られて別行流布せしことは四百論の最も簡單なる要略書とも見らるべき百字論が既に後半の思想のみを述べ居ることによりてもその所以あることは知らるゝ如く、同じく四百論の綱要書たる百論も亦その後半を中心とし、前半の部分が捨罪福品に攝せられて現行のそれの如くなつたものと見るべきでなからうか。

註

- 1、宇井伯壽氏著印度哲學研究第一、頁二六一
- 2、龍谷大學論叢第二七九號、頁二四以下
- 3、Cordier, Catalogue du fonds tibétain, Tome III, p. 293, 294
- 4、印度哲學研究第一頁二八三
- 5、四百論の前八品をかくの如く見ることは、月稱註四百論の劈頭に、第九戒常品の始めに述べられて居る。
(Cordier, Catalogue du fonds tibétain, Tome III, p. 304, Bodhisattvayogacarā caṅkṣātakatīkā, mdo-ḥgrel XXIV, p. 33 b 8-34a, 7 et 102b7-8.)
- 6、此は説菩薩行品 (Bodhisattvācārasaṅgīdānīyāna) の第五偈即ち四百論の第一〇五偈

bṣam-pas byan-chub-sems-dpeḥ-1a || dge-ba ḥam ḥon-te mi-dgeḥaṅ ruḥ ||
thams-cad dge-legs-sīd ḥgyur-te || gan-phyir yid deḥi dboh-gyur phyir ||

『意樂(ごも)りて菩薩(ぼさつ)は、善(ぜん)も不善(ふぜん)も凡(ただ)て勝善(しょうぜん)なる。意(い)が彼(か)〔菩薩〕によりて征御(せいご)せられたるが故(ゆゑ)なり』の註釋(しゆしやく)である。

mi-dge-ba-ni sdug-bsnal dan nian-so'i-ge man-par smin-pa-can yin-pa-nid-kyi phyir mi-dge ba'ho || dge-ba yan bde-ba dan bde-rgo'ji man-par smin-pa'ñi hbras-bu-can yin-du zin kyan skye-ba dan rga-ba dan hchi-ba lasogs-pa'ñi sdug-bsnal bscrub-par byed-pa-nid-kyi phyir-na dge-lags ma yin-no || dge-lags ma-yin-pa'ñi las gñis-po hdi thams-cad-ni byan-chub sems-dpañ sems-la dhan tibob-pa nam-s-la dge-igs-nid-du hgyur-te | skye-ba-can nam-s-kyi hkhor-ba ldog-pa'ñi rgyur gnas-so (Caturśatkañkā, mdo-hgrej, Tome 24, p. 101, b, 8-102, a, 2)

7、此は「人の五欲享樂に對する執著を斷ずる方便の説示」(Manusyakāmahogālayaprahāṅopyasa nidānāna) 卍の第二〇偈即ち四百論の第一七〇偈

viśayaś ca śubheneśjo viśayañ sa ca kutstah |

śreyān yasya pariyāgo niṣpannēpi tena kim || (Hareprasād sāstrī, Caturśataka by Āryadeva, p. 472)

『境が善〔業〕によりて所愛なる時も、彼境は又毀悪なるものなり。凡そそのものを捨てるべしとの勝れたる如きものは、それが成就せらるゝべし何の要なし』
下註釋の大意である。

8、四百論の第一五七、一六七、一六八の諸偈をその下の註釋によりて見るに何れもかくの如き意味を解せらるゝが、偈そのものゝ上にその思想の最も明かに見らるゝは第一七三偈である。

gra-ba lra-bu bsod-nams-ni || nam kun rhan-pa dan mshuñs-pa ||

gan-dag dge-bahan mi hdoč-pa || de-dag mi-dge ji-lkar byed ||

『果の良き相を希求する〔給料傭人の如き福德は云何にしても給料を等し。〔自他の樂の生ずる因としての福德は最勝なるも、その福德なる善すら輪廻の因なる故に〕善すら欲せざる〔賢き人〕等は云何で非善を作すべき』

10、百論疏卷二(上海切德林本)一右一左『問今所存者爲是前之五十、爲後之五十、爲擇其精要取五十耶。肇公既云後五十偈於此土無益。故知今之所翻是前五十矣。』

11、百論疏卷二、九左には百論を「初捨罪福、中則破神、後洗一切法」を三分科して、かく分科したる所以を説示して居るが、更に疏卷四、一右には、捨罪福品に對しては前の分科と同じ意味の下に捨罪福品の大部分が『示於始學入道之方謂申佛漸捨之教』と云ひ後九品を總括して『第二從破神品至破空品末明破邪歸正而正辨於破邪』の云々。

12、*bstan-bcos bshu brya-pa de-ni da-taḥi sñan-neg-mkhan bstun-pa chos-skyon-gis ji-ltar bkod-pa phyen-nas mam-pa gñis-su byas-te | gog-ni chos bstan-pa brya-pa-ñid-duho || gshan-ni rstod-pa brya-pa-ñid-duho || da-ni blaḡ-gis gciḡ-tu de mam-dbya-bar bya ||* (Catuḥśātkārikā, mdo-ḡrel, Tome 24, 34 a 7-8)

『此四百論は當今の文辭に巧なる者(Kaw)大德護法(Dhadanta Dhamapāla)がその設定ある如く分ちて二種に分せり。即ち一は法説示(dharmadeśa)の百義として、他は論諍(vivāda)の百義としてなり。今我は一としてそれを分別せざるべからず』

此語によれば護法には前分「法の説示の百論も存したるなるべく、立辨は後の評論百義のみを廣百論として傳へたる」と知らるゝ。提婆自身の立場から云ふても勿論後の百義が中心となるべきは云ふ筈もない。

二、百字論本文漢藏對照及び譯註

百字論の本文は漢譯に於ては終りの流通偈の中に同列に出されてあり、椎尾氏によりて此が百字論偈であると指摘せられたのである。その論偈は註釋中に一々引用されてあるべきものであるが、

前にも一言せる如く註釋中引用の本文と終りに出されたるそれとは内容多少相錯誤し、西藏譯の本文も註釋中引用のそれと別行本とは言葉が多少相違せる點もあるから、本文だけを別に列擧して對照考察することも意味があると思ふ。西藏譯は本文と註と二部から成つて居るが大谷大學所藏北京版本にてはその二部に對して唯一の題名が本文の前に掲げられて居り、その題名はコルデイエも注意する如く註釋の題名であるから、本文が餘り小部なる爲に本文註釋をこめて註釋の方の題名が二部に對して與へられることゝなつたのであらう。因みに漢譯は先にも言ふ如く四句一行の五行から成つて居るが西藏譯は爾かく見られないから、今は一句宛を對照することゝした。

因みに此百字論の西藏譯は大谷大學所藏寺本先生將來の北京版を底本とし、ギイメー博物館所藏のナルタン版を參照したものである。漢譯は固り大正藏經の校訂を參照したが、結局西藏譯と比較して意味の妥當なるものを選択したのであるから、漢譯諸版によりて既に行はれた諸校訂に對しては關說せない。

yige bryga-pahi rab-tu byed-pahi hgerl-pa

百字論註

hphags-pa lhu-sgrub-kyis mdsad bslung-so ||

龍 樹 造

ryga-gar skad-du akṣa-ra-sataka |

印度語にて Akṣaraṭaka

bod skad-du yige bryga-pa |

西藏語にて 百字

[bzam-pahi dpar rdo-rje-la phyag-hshal-to]

〔妙吉祥金剛に稽首禮す。〕

一切法無一 dhos-po man[^s] gcig-pa-ñid ma-yin-no ||

如是法無異 gshan-pa-ñid kyañ de-tshin-no ||

云何是有相 yod-pa-ñid-du bsgrub-par bya-bo yin-no ||

med-pa-ñid kyañ bsgrub-par bya-baño ||

rgyu yod-pa ma-yin-no ||

因法則無體 ma-yin-te bhos-pahi phyi-ro ||

非相形而有 hdod-pas yod-pa ma-yin-no ||

自是法不然 lrcda ma-grub-po ||

汝法則不成 gtan-tshigs-dag don med-do ||

如此不用因 ran-bshin brjod-par byaño ||

汝當說體相 gcig-ñid-la skyon yod-do ||

一則是⁴有過 gshan-ñid-na dhos-po med-pa yin-no ||

若爾則無體 hdsin-par mi-nus-so ||

五情不取塵

色法有名字 dhos-po mthon-ba ma-yin-no ||

所見亦無體 yod-pa-ni bya-ba ma-yin-no ||

以有不須作 de-dag-la skye-ba med-do ||

彼法無有生 hdus-byas med-do ||

有爲法無體 phyogs gcig tsham-mo ||

諸法は一性にあらず
異性も亦同じ。

有性は證明せらるべきものなり。

無性も亦證明せらるべきなり。

因は有にあらず。

然らず、待するが故なり。

所許の故に有にあらず。

〔家法の〕定むるころは不成なり。

因等ば實義無し。

自性を説かざるべからず。

一性に於ては過失あり。

異性なる時は物は無なり。

取り得べからず。

物は見らるゝにあらず。

有は所作にあらず。

それらには生無し。

有爲は無し。

一方處のみなり。

等如夢〔無異〕 *rmi-lan dai mshuis-so* 〓

夢と等し。

相⁽⁷⁾ *mi-ni dios-po ma-yin-ro* 〓

名は物にあらず。

亦無有異 *bsgrub-bya dai mshuis-so* 〓

所立と等し。

yi-ge brya-pa rtsogs-so 〓

百字完了。

此是百字論

提婆之所説

註

1、註釋中引用の此句には「*cu*」の辭無し。無き方可し。

2、漢譯には此西藏文に相當すべき箇句を缺く。併し長行釋中此句の來るべき處には「汝立無者、因何而成」にて此句のあらざるべからざる跡を示して居る。

3、「相形」は西藏譯と對照すれば「*dios-pa*」即ち梵語の「*apeksa*」である。*apeksa*は中觀系諸本に於ては諸法が相依相待の故に無自性を示す場合に用ひらるゝ重要な語であつて、羅什譯中論偈にては六個處に於て「因」を譯せられ、「待」を譯せらるゝ個處も一度あり(佐々木月樵著龍樹の中論及哲學の索引)、その他玄奘譯俱舍論十地經等に於ては「觀待」又は單に「觀」をも譯せられ、こゝに「相形」を云へるは如上の意味よりして異させねばならぬ。

4「爾」の語は「異」でなければならぬ。現に吾人は長行釋中その句の有るべき處に於て「汝説異則無」の語を見出すものである。

5、此句は西藏文中に見出されない。西藏譯による限り長行中次の「物は見らるゝにあらず」を云ふ句の引出され

る前の外人の難問として、「瓶は正しく見らるゝものなり。色_三して説かるゝが故なり」の一文を見る。此漢譯の「色法有名字」の句は怖らくはその長行中の外人の難問が本文の如く解せられて入り來れるものと思はる。

678、漢譯の「夢」の語以下は長行釋を述べて合せて見ても殆どその意味は了解せられない。「相」_三あるは辛_三じて西藏語の「dros-po」_三「bhava」なること、「無有異」は是亦西藏語の「mshun-sö」_三「tulya」なること知らるゝが、「無異」に至つては見當がつかない。尤も漢譯長行釋の終の部分は西藏譯のそれに比し文章簡に過ぎてその所論の意趣を充分に知らしめないから、西藏譯の第二十一句に相當するものを漢譯長行中に見出すのは少し無理でもあらうけれど、その前の句の如きは「名非是體」_三明らかに出て居るのである。此が何うして本文の句_三理解せられずに「相」の一字のみが残ることゝなつたのであるか、頗る奇異なるものがある。

三、百字論註漢藏對照及び譯註

一

百字論一卷

提 婆 菩 薩 造

後魏北印度三藏菩提流支譯

我今歸依聰叡師_一 厥名提婆有大智_一

能以百字演實法_一 除諸邪見向實相_一

說曰。何故造論。爲破我見等一切諸法各有自相。

僧佉曰。一切法一相，是我誓說。以何因緣立一切法一相。以盡同共有_レ一故。喻如瓶衣等。物體各有_レ一。以是義故，當知一切法名爲_レ一相。是故一義成。

內曰。非_レ一。

何以故。汝要誓言，立_レ一相義，爲_レ一爲_レ二。若是一者唯有_レ要誓。不應有_レ二以是因緣。汝所立_レ一，此義卽破。

rgya-gar skad-du | aksara-çatakati nāma britti |

bod skad-du | yi-ge brgya-pa shes-bya-bahi hgrrel-pa |

[hjam-pahi (dpal)^(?) rdo-rje-la phyag-ñshal-lo]

thams-cad thams-cad-kyi bdag-ñid-do shes dan-bcañ-ba gañ nam | gañ-dag gam | gañ rnam
ñdod-pa de-dag-gi gtan-tshigs-las grub-par mi hgyur-gyi | gtan-tshigs-ñid med-par hgrub-par
hgyur-ro ||

ñdi-sñam-du [thams-cad]^(?) thams-cad-kyi bdag-ñid-do shes-bya-bar dam-bcañ-ba-ni | gtan
-tshigs kho-na-las de yod-par mtshuns-pahi phyir-ro | shes-bya-ba-ni gtan-tshigs-so || dpe gañ she
-na | bunn-pa dan snam-bu la-sogs-pa bsñin-no || ji-tar bunn-pa dan snam-bu la-sogs-pa bsñin-du

dhos-po thams-cad yod-pa-nid-du mtshun-s-par tñjng-te | de-lta-bas-na dhos-po rnam-s gcig-par grub-par hñod-do she-na | smras-pa |

dhos-po rnam-s gcig-pa ma-yin-no ||

ñdir gñan-gñshigs gani yin-pa de ci gcig-pa-nid-kyi mtshan-nid-du gyur-pa shig gam | ñon-te ma-yin | gñi-ga ltar yai skyon yod-do || gal-te gcig-pa-nid-kyi mtshan-nid-du gyur-na-ni ñchi ñdñhi gñan-tshigs-su ñgyur-ba ma-yin-te | ñam-bcañ-ba-las gñan ma-yin-pañi phyir-ro || ñon-te, ññi tha-dad-pañid yin-na de-lta-na ññi ñam-bcañ-ba ñams-te gñan-tshigs-las gñan yin-pañi phyir-ro || de-lta-bas-na dhos-po rnam-s-gcig ma-yin-no ||

²⁾ 百字を稱せらるゝ註

⁴⁾ 一切は一切の自性(atmatva)なりとの立宗(pratññā)、又は〔かゝる立宗の何れも〕、又は〔立宗〕を許す(içchanti)人々の因(hetu)中の成就(siddhi)はあるべからずして、因性(ñeturva)なしを成せらるゝし。

かくの如く一切は一切の自性なりとの立宗は、因中にのみ彼有り〔この義〕に於て等しきが故なり、と云ふは因なり。喩(dīrghānta)は云何。瓶と布等の如し。凡そ瓶と布等の如く、一切法(dhava)は有性(āstiva)なる〔義〕に於て等しく起る(pravartante)。故に諸法は一として成せらるゝと許すと人云は

「論主は」言へり。

諸法は一に^一 *eka* (Dhāvā naikatvam)

此處に彼因 (hetu) なるものは、(1) 一性 (ekatva) の相 (lakṣaṇa) たれるものなるか、(2) 或は否か。兩者共に過失 (dosa) 有り。(1) 若し一性の相たらんか、このものが彼ものゝ因となれる〔と云ふこと〕あらず。(2) 一ならば因は「立宗より異 (anya) に非るが故なり。(2) 若し⁶⁾ 此れ異性 (pīṭhaktva) ならば、爾らば是れ立宗の破壊なり。〔何故なれば彼立宗は〕因より異なるが故なり。夫故に諸法は一に非るなり。

註

- 1、漢譯にのみ存する歸敬偈については先に緒言中述べたるが如し。
- 2、西藏譯の梵語、西藏語に於ける題號は常の如くなれば、今和譯中には此を省略する。西藏譯の歸敬文中の「dpa」は北京ナルタン兩本共缺けて居るが今は先の別行本文のそれに倣ふて加へることとした。
- 3、ナルタン版によりて「hams-cad」を加へる。
- 4、長所釋劈頭の一句、漢譯は一般的に有自性論を破することになつて居るから、此文がそのまゝ此一論の總說となり、次の僧法の立言と別になることゝなるが、西藏譯の如くにては此總說たるべきものが次の僧法を破する一節だけの爲の總說とされる態である。是れ次に僧法を破する第一節の始めに、漢譯とは異つて「smas-pa; 外人言ふ」の文の置かれざりし所以であらう。

5、此立宗は漢譯が既に僧法を示す如く、數論學派に於て大 (mahat) 以下地 (pīṭhivī) に至る一切の諸現象は、そ

の諸現象の未だ現はれざる因なる自性(Prakṛiti)中に自性(amatva)にして存するに云ふそれなるに言ふを俟たず。

6、漢譯は此一項を缺く。

二

毗舍師曰。汝言一破、我今立異。捨一過故。

内曰。1) _____

汝若立異、我還立一。何以故。汝若離因立異、我亦離因立一。

毗舍師曰。我要立異。所以者何。諸法差別各異相故。喻如象駝鹿馬。如是等類其相各異。以是故諸法相異。一切法皆異。是故異義成。

内曰。汝以此彼相不同故、是異義成者、以相別故法各是一。汝所立異、要言則壞。要言壞故、則知異相不立。

hdir smras-pa | gcig-pa-ñid-du ldod-pa de-la skyon de yod-kyi bdag-cag-ni gshan-ñid-du
ldod-pa yin-no || she-na |

smras-pa | gshan-pa-ñid kyai med-do ||

hdir gshan-pa-ñid-la yai skyon hdi-dag hbyuñ-bar hgyur-te | ji-ktar she-na | gal-te re-cig

khyed-cag gtan-tshigs med-par gshan-nid-du hdod-na-ni dehi tshe nahi yan gtan-tshigs med-pa
kho-nar gcig-pa-nid-du hgyur-ro ||

hon-te gtan-tshigs kho-na-las dios-po namns gshan-pa-nid-duho shes dam-bcas-pa hdi-la da
-ni gtan-tshigs brjod-par byaho || smras-pa | mtshan-nid tha-dad-pahi phyir-ro || shes-bya-ba-ni gtan
-tshigs-so || dpe-ni rta dani glan-po la-sogs-pa bshin-te | ji-lar rta dan glan-po la-sogs-pa de-dag
mtshan-nid tha-dad-pas tha-dad-pa bshin-du dios-po thams-cad kyan yin-te | de-bas-na dios-po
namns gshan-pa-nid-du grub-po she-na |

smras-pa | gal-te gtan-tshigs hdi-la yan mtshan-nid gshan-nid⁽²⁾-du gyur-pa ma-yin-na-ni
dehi-tshe gtan-tshigs de bsrub-bya dan⁽³⁾ mtshunns-par hgyur-ro || gan bsrub-bya dan mtshunns
-pa de-ni gtan-tshigs ma-yin-par hgyur-te | dam-bcas-pa-las gshan ma-yin-pahi phyir-ro || hon-te
mtshan-nid gshan-pa-nid-du gyur-pa yin-na-ni dehi-tshe dam-bcas-pa namns-pa-nid-du hgyur-ro ||

此處に〔外人は〕⁽⁴⁾言へり。一性(ekatva)を許す處には(isyamaṇe)との過失(dosa)有り。雖も我等は
異性(anyatva)を許すなり。〇

〔論主は此に答へて〕言へり。異性も亦無し(nānyatvam api)

此處に異性〔の立許〕にも亦それらの過失起るべし。云何が然るか。曰く若し且らく汝等が因
(hetu)無くして異性を許さんか、爾時は我にも亦因無くしてのみ一性を〔許すこと可能〕なるべし。

『因より實に諸法(Dhava)の異なる義(anyaiva)に於てなりとの此立宗(pratīṅ)に就いては今因を説かざるべからず。曰く相(lakṣaṇa)差異(pritihak)するが故なりと云ふは因なり。喻(dīṣṭānta)は馬象等の如し。凡そそれらの馬象等は相別なるに由りて差異ある如く一切諸法も亦爾なり。故に諸法は異性として成せらる(siddha)』と若し「外人」云はゞ、

〔内は〕言ふ。(1)²⁾若し此因中に更に別なる相(lakṣaṇa)有るに非るときは、爾時彼因は所立(sādhyā)と等しく(sama)なるべし。凡そ所立と等しきものは彼れ因に非るべし。立宗(pratīṅ)より異に非るが故なり。(2)若し相、別性(anyaiva)としてあるならんか、爾時立宗は壞せらるることとなるべし。

註

1、漢譯には此處に本文が見出されない。

2、原文は北京ナルタン兩版共に單に「*gshan-du-kyu-nar-ni*」である。漢譯は此項を缺くが故に依用すべくもないが、若し原文の如くにては「*non-te-sadha va*」にて書を起する、第二項の意味の區別が見られないことになる。私は此一項を、中論觀三相品の第三偈に於て「有爲をして有爲たらしむる因として三相を考へるが、その三相を有爲の三相たらしむるには因として更に餘の三相を豫想せねばならぬ」ことを述ぶる如く、因を證明する餘の因無くば、因の價値が立許し同等に墮入ることを云はんことを同じき理趣(yuti)なることを認め、かく訂正するの理なるを信するものである。

3、北京版にて單に「*shunā*」をありしを、ナルタン版にて訂正。

4、西藏譯に於ては第一節の外人の問起に對し、それが僧佉なることを注意する語無かりしが如く、今も漢譯の

示す如く、此外人を毗舍師(Vāśeṣika)に歸する語を有せない。

5、上にも述ぶる如く漢譯は此項のみの、西藏譯よりも少し詳細に述べられたるものと見らるゝ。漢譯の示す處に相俟つて此項の謂はんことを意趣 (abhiprāya) を考ふるに「若し相が別性として成立せるならば、諸法は他に待して異相なるによりて成立せるには無く、それ自らにて成立せるが故に、諸法は相互に異性たるによりて成立すこの立許が破らるゝ」と謂はんことをあらう。かくして結局此項は中論觀合品第十四、第六偈の言はんことを意趣に歸するものである。曰はく、

yady anyad anyad anyasmād anyasmād apy rite bhavet || tad anyad anyad anyasmād rite nāsti ca nāsty atah ||
若し〔彼ものに待して〕異〔こなる此もの〕が、〔彼〕異なり異ならば、〔爾時は彼〕異無くしても尙〔此〕異有るべし。されど〔彼〕異なくしては〔此〕異たるものあるにあらず。夫故に〔異は〕無し。

三

外曰。以_二異相不_レ成故、我今立_レ有相_一。以_二法各有相故、當_レ知有相義成。有相成故、當_レ知一異亦成。

内曰。1) _____

汝今立_レ有必應_レ有因。若無因而立_レ有、我亦無因而立_レ無。

外曰。我要言立_二一切法有_一。何以故。現見諸法各有相故。喻如虛空中華、無有體相故不可得。瓶衣等物現有_レ用故、當_レ知一切法皆是有相。以是因緣故、有義得_レ成。

內曰。汝立有者，因有相故有，因無相故有。此二俱有過。若以現相故成有義者，現相是有。有亦是。有。二有理不相成。若言因無，要誓則壞。有無俱非，因故有義則破。

hdir smras-pa | gal-te dños-po rnamns gcig-pa-ñid dam | gshan-pa-ñid ces-bya-bar ma-grub-pa
(2) de-lta-na yan yod-pa-ñid-du grub-ste | de grub-pa-na dños-po rnamns gcig-pa-ñid dam gshan-pa-ñid
gdon-mi-za-bar grub-par hgyur-ro she-na |

hdli-la brjod-pa | yod-pa-ñid bsgrub-par bya-ba yin-no ||
(3)

hdir gal-te khyed-cag gran-tshigs med-pa-las yod-pa-ñid yin-na-ni bdaq-cag-gi med-pa-ñid kyai
gran-tshigs med-pa-las hgrub-par hgyur-te | gran-tshigs med-pa-ñid-duho || hon-te gran-tshigs-las
dños-po rnamns yod-paño shes dam-bcas-pa dehi-tshe hdir gran-tshigs brjod-par bya dgos-so ||
(4)

smras-pa | mñon-du dmigs-pahi phyir-ro || dpe ci-she-na | smras-pa | chos mi-mthun-pa-ni nam-
mkñi me-tog bshin-te | ji-itar nam-mkhahi me-tog dños-po med-pas ni-dmigs-te | gan-gi phyir
(4) de-dai chos mi-mthun-pas bunn-pa dan snam-bu-dag-la sogs-pahi dños-po rnamns yan-dag-par dmigs-
pa dehi phyir dños-po rnamns yod-pa yin-no || she-na |

smras-pa | hdir gran-tshigs gan yin-pa de yod-pa-ñid-kyi mtshan-ñid-du hgyur-ba shig-gam |
hon-te ma-yin | des cir hgyur she-na | gal-te yod-pa-ñid-kyi mtshan-ñid-du hgyur-na dehi bsgrub-
(5)

par dya-ba dan mtshunis-par hgyur-ro || hon-te yod-pa-nid-las gshan-pa kho-na yin-pa dhi-tshe yai
dam-bcah-pa nam-par hgyur-te | de-bas-na yod-pa-nid mi-hgrub-po ||

〔外人は〕言へり。若し諸法 (bhāvāḥ) が一性 (ekatva) 又は異性 (anyatva) を成せられざる (asiddha) も、而も有性 (astiva) をして成せらる。彼 (有性) 成せらるゝ時は、諸法の一性又は異性は畢竟じて (avaśyam) 成せらるべしなり。

此に對して〔論主は〕言へり。有性は證明せらるべきものなり。 (astivain sādhyam)

茲に若し汝等が因 (hetu) 無き處に有性を〔立する〕ならば、我等の無性 (nastiva) も亦因無き處に於て成せらるべし、無因性 (ahetukatva) をしてなり。若し〔汝によりて〕因〔ある〕よりして諸法有りて立宗 (prāṇa) せらるゝならば、爾時は此に就いて因を説かざるべからず。

〔外人は〕言へり。現に (sakti) 見らるゝ (upalabhyate) が故なり〔云ふは因なり〕。喩は云何。曰く。〔現に見らるゝもの〕相異せるもの (vaidharṇya) は虚空の華の如し。虚空華は體 (bhāva) 無きが故に見られざるが如し。それとは相異りて (advaidharṇya) 瓶 (ghaṭa) 布 (pāṭa) 等の諸法は有りなり。〔内答へて〕曰ふ。此處に因なるものは彼れ有性の相 (astiva-lakṣaṇa) となれるものなるか、否か。それによりて云何がなる。若し有性の相となれるものならんか、〔爾時は〕彼〔因〕によりて證明せらるべきもの (sādhyā) を等しかるべし。若し有性より實に異 (anya) なる時は、又立宗 (prāṇa) は破壊

せらる。夫故に有性 (astiva) は不成なり (asiddha)。

註

- 1、漢譯長行中には「本文」に相當する文見出されず。
- 2、北京版には「de」缺く。
- 3、原文は兩版共に「serub」であるが文法的に見て「b」の添前詞あるを可とする。
- 4、北京版には「po」缺く。
- 5、原文には兩版共に「dgos-par bya dgos-so」があるが、「dgos-par bya」無き方普通なり。
- 6、北京ナルタン兩版共に「ma yin-no」があるも漢譯によれば明かに「na」は誤なり。
- 7、此一文西藏譯は論の表示に於て漢譯のそれと前後す。
- 8、西藏譯は前節に於ける内の返答と同じき論法を用ふ。漢譯は因の「有亦是」立宗の「有」云ふ處、西藏譯のそれと同じきものを採りつゝ、更に「二有理不成」にて現に有る有によりて有を證せんとするこの不可能を表はす點は、中論去來品第五偈に見ゆる、去 (gamana) を證せんとして去りつゝあるもの (ganyamana) を用ふる場合に、二去に墮することを述べたると同じき理趣まで進めてその所論を結ばんとしたるものに見らるゝ。

四

外曰。若破「我有」汝則立無。無義得成、有還得立。喻如世人飲食。先因羸澀故有美好。以是故汝破「我有」、當知是無。

内曰。

1)

汝立無者、因何而成。汝若無因而成無、我亦無因而成有。

外曰。云何而知。以無體相故。喻如熱時燄。自無體相。何況而有少水可得。以是因緣故。一切法無一塵相可得。是故我立無義成。

內曰。汝所立無、爲有因、爲無因。若言無因、空有要誓。若言有因、要誓則壞。汝若無、無亦不成。

hdir smras-pa | yod-pa-nid-la bkag-pa-nid-kyis med-pa-nid khas-blans-pa yin-te | dper-na, smra-
ba-po bdag-gis de-rin zas shim-po myoi-no | shes zer-na don-gyi cugs-kyis shar mi-shin-par rloggs-
pa bshin-no || she-na |

smras-pa | *med-pa-nid-du bsgrub-par bya-baho* ||

gal-te khyed-cag med-pa-nid gtan-tshigs med-pa-nid-du hdod-na | bdag-cag kyan gtan-tshigs med-
pa-nid kho-nas yod-pa-nid-du hgyur-ro || hdi-sñam-du dnos-po rnams med-pa yin-no shes dam-
beas-pa hdi gtan-tshigs-nid-las yin-par hdod-do ||

hdir gtan-tshigs gan yin she-na | rai-bshin med-pahi phyir-ro shes-bya-ba-ni gtan-tshigs-so ||
dpe ci she-na | dpe-ni smig-rgyu ste | ji-ltar gan-gi phyir smig-rgyu rai-bshin med-pahi phyir
yod-pa yin-la las skad-cig-tsam yai chu yod-pa ma-yin-pa de-ltar snam-bu la-sogs-pa rnams-la yai

snal-ma la-sogs-pahi yan-lag rnam-s-kyis phy-e-shin gzi-gs-na yod-pa ma-dmigs-te | dehi phyir dños-po rnam-s med-pa shes-byaho || she-na |

lhidir gtan-tshigs-su ne-bar bkod-pa gan yin-pa de ci med-pa-ñid-kyi mtshan-ñid-du gyur-pa hant | hon-te ma-yin | gal-te med-pa-ñid-kyi mtshan-ñid-du gyur-na-ni | de-lta-na bsgrub-par bya-ba dai mtshuis-par hgyur-ro || ci-ste med-pa-las gshan kho-na yin-na-ni dehi-tshe dam-dcañ-ba rnam-par hgyur-te | dehi-phyir med-pa-ñid kyan ma-grub-po ||

此處に〔外人は〕言へり。有性 (asītva) を遮るる (pratiśedha) のことよりて無性 (nāstīva) は立許せらる (abhyaṅganyate)。例へば言者が「今日美食を享受せり」と言へる時、義の結果として (arthasāmarthyāt) 前には〔食〕美好ならずと解了せらるゝが如し。

〔論主は此に答へて言へり。無性を〔立〕する處にも〔それは又〕證明せらるべきものなり。 (nāstīva-nāpi [sādhyam])。〕

若し汝等が無性を無因義 (aheturva) 中に許すならば、我等は又無因義のみによりて有性を〔立するべし〕あるべし。〔由て〕かくの如く諸法 (bhāvāḥ) 無なりと立宗せらるべし (pratiñā) は是れ因の義 (hetutva) なる〔せる〕をかく許せらるべし (isyate)。

〔外人若し〕此處に因とは何なるか。自性無なるが故に (niḥsvabhāvāt) の因は因 (hetu) なり。喩

(dīpīkanta) は云何。喩は陽燄 (marici) なり。凡そ陽燄は自性無きが故に有なる處にも〔その〕作業 (karman) は刹那量 (ksāṇamātra) すら〔實なる〕水の〔現に〕有る〔如くに〕は非る如く、その如く布等に於ても亦糸等の支分 (āṅga) に従つて分解せられ、見らるゝ時は、〔その〕有は了得せられず (no-palabhyate)。故に諸法は無を稱せらるゝ云はゞ、

〔内は答へて言へり。〕茲に因として立せられたる (upasthita) ものは、彼れ無性 (nastiva) の相 (lakṣaṇa) たるものならんか、否か。若し無性の相たらんか、爾らば所立 (satya) と等しかるべし。若し無より異〔即ち有性の相〕ならんか、爾時は立宗 (prāpti) 壞せらるべし。夫故に無性も亦成せられず。

註

- 1、漢譯は茲にも本文を缺く。
- 2、原文は兩版共に「samb」なり。別行の本文と語法少しく異れど、やはり別行の本文の如く「bsamb」にある方可なるべし。
- 3、漢譯文は此句が此文章の始に出されたるなり。
- 4、漢譯には此一行の文缺く。

五

外曰。一切法有因。汝彼有無者、此義則不然。何以故。如有涅槃、縷、蒲葦等故、知一切法皆有因。

因。

內曰。無因

汝言有因故有。有因則是無。若涅中先有瓶、泥蒲縷等皆非是因。何以故、因中先有故。若因中先無、亦非是因。¹¹⁾喻如沙中無油、沙非油因。若言亦有亦無、義亦不成。何以故、有二過故。¹³⁾復次有亦不生無亦不生。若從無因生、因復何用。爲若從有因生、要警言則壞。汝先言一切法皆有因生者、此事則不然。

l̥dir smras-pa | l̥dir l̥jin-pa dai snal-ma dai thag-bzani la-sogs-pa dños-po rnam-skyi rgyu⁽³⁾
 ma-bkag-pa de-bas-na dños-po rnam-s yod-do ||

smras-pa | rgyu yod-pa ma-yin-no ||

hdi-la l̥bras-bu yod-pa gan-dag yin-pa de-dag-gi rgyu-ni yod-pa ma-yin-no || ciñir phyi sho-
 na | dños-po yod-pa bunn-pa dai snam-bu la-sogs-pa rnam-skyi rgyu l̥jin-pa dai snal-ma dai |
 thag-bzani thag-ma la-sogs-(pa)-la ma-yin-te | yod-pahi phyir-ro || gan-dag l̥bras-bu med-pa-dag-
⁽⁴⁾ gi yan rgyu yod-pa ma-yin-te | med-pahi phyir-ro || gan-dag l̥bras-bu yod-pa dai med-pa de-dag-
⁽⁶⁾ gi yan rgyu yod-par ni-l̥gyur-te | gn̥i-gahi skyon-du thal-bahi phyir-ro || de-la gan yod-pa de-ni
⁽⁷⁾ yod-pahi phyir dai | gan med-pa⁽⁸⁾ de-ni med-pahi phyir-ro || gcig-la gn̥i-ga srid-pa yan l̥gal-bahi

phyir-ro || gan-gi yod-pa dehi mtshan-tid hdsin-pa de-yis med-pa ma-yin-no || gan-gis med-pa dehi
 mtshan-tid hdsin-pa de-yis yod-pa ma-yin-no || dehi-phyir de nams-kyi rgyu yai yod-pa ma-yin-
 no || gan-dag rgyu med-pa-tid-las yin-pa de-dag-gi yai rgyu yod-pa ma-yin-te | rgyu-med-pa-tid-las⁽⁹⁾
 grub-pahi phyir-ro || rgyu-med-pa-tid-las grub-pa yin-no shes-bya-ba dehi tshe yai hdi-dag-gi dam-
 beah-ba nams-par hgyur-te | rgyu dai byed-rgyu dai rgyu-mtshan shes-bya-bahi don gshan ma-yin-
 no || de-ta-bas-na rgyu yod-pahi phyir dios-po nams yod-do shes gan byed-pa dre-ni ma-yin-no ||
 「外人は」此處に言へり。此處に泥と糸と織機等なる諸法の因遮せられ (niruddha) されば夫故に諸
 法は有り。

〔論主は此に答へて〕言へり。因は有にあらず (na hetur bhāvah)

此處に果〔現に〕有る (satkārya) なる彼等〔果〕の因 (kāraṇa) は〔現に〕有るにあらず。何故なるか。
 瓶衣等〔現に〕有る物 (bhāva) には泥、糸、織機等なる因〔存する〕にあらず、〔現に〕有るが故なり。
 果〔現に〕無きもの (asatkārya) の因も亦有るにあらず、〔果現に無きものは〕無なるが故なり。⁽¹¹⁾ 果有に
 して又無なる (satasatkārya) ものものにも亦因有ることならず、兩者の過失 (dosa) に墮するが故なり
 (prasāṅgāt)。⁽¹²⁾ 「即ち」その中、現に有なるものは有なるが故に又無なるものは無なるが故なり。又一
 處に〔有無〕兩者の存することは相違せる (viruddha) が故なり。〔現に有なる〕⁽¹³⁾ その有の相 (taksanā) を

取るによりては夫故に無にあらず。「無なる」その無の相を取るによりては夫故に有にあらず。さればそれら〔瓶衣〕等の因は又有るにあらず。無因性 (ahetukavya) より〔なれる〕もの等の因も亦有るにあらず。無因性より成立せるが故なり。無因性より成れりと云ふときは、又、「先の」¹⁴⁾これらの立宗は壞すべし。因と作因 (karakahem) と因相 (nimitta) と云ふ義は別なるに非るなり。夫故に「因有るが故に諸法あり」と謂はるゝにはあらず。

註

- 1、註(13)に於て關説する如く、有因云ふ「有」の字は「無」でなければならぬ。
- 2、兩版共に「seyu」を示すが漢譯に依りて「syu」なること明である。
- 3、兩版共に「med-do」なれど意味通ぜず。漢譯の示す如く「yod-do」たるべきである。
- 4、「thag-na」はターヌ氏辭典に由る限り毛織物等の柔かにして美なるを云ふから「tag-zan」の形容詞としては頗る奇異なるものと言はねばならぬ。外人の問起中にもその用語例の出づる如く寧ろ此語の無い方が正しい形でないであらうか。
- 5、原文に無きも「pa」あるを可とする。
- 6、兩版共に「si」なる具格として示されあれど此は前上の因中有果の場合の文よりも想像し得る如く、明に「si」なる屬格である。
- 7、原文には「sa」ありしも前註の「si」が「si」でなければならぬ如く此「sa」も「si」たるべきこと疑は無い。
- 8、原文には「med-pa」の次に「ni」あるも、その前句に「yod-pa de-ni」があることによりて知らるゝ如く「ni」は誤であ

る。

9、原文には「na」の否定詞無し。意味の上より考へてそれあるを可とする。

10、漢譯は此句に相當する句の次上に前節との連絡を述ぶる一文を有す。

11、漢譯はこゝに喩を述ぶる一文あり。

12、漢譯には此一行の文無し。

13、此一行に相當する漢譯を強いて求むれば「復次有亦不生無亦不生」の一文である。此句の文を迎へて解釋しても西藏文の示すそれとの意味の關係が見出せぬ。西藏譯の此文は「有はさうしても有、無は畢に無なる」ことを示して「一處に兩者の存する」こと無し」ことを示す次上の文の説明と見られ、次下に有、無、亦有亦無の三者の場合の結語として「さればそれら瓶衣等の因は又有らず」を述べられたものである。然るに漢譯はそれを「復次」を項をあらためて「有亦不生無亦不生」を言ひ出したから、その句の意味を連絡せしめん爲に、次に「若從無因生——若從有因生」この兩項を上げたものであるが、この後者を漢譯の如く「從有因生」をすれば次下の要誓を破るの文が意味を有せざることとなり、旁以て此處の「復次」以下の漢譯文は頗る異なるものと見なければならぬ。

14、漢譯が此句に相當する句の次下に「汝先言一切法皆有因生者」云々にて立宗の破壊せらるゝ、所以を示したのは頗る可きべきものである。

15、漢譯は此句を缺く。併し此句は前上の文中の「因」の内容を示したまでのものであるから、此句無しにて大體の意味にさしたる相違を來すこと云ふ譯でない。因みに「作因」は柳博士翻譯名義集の 463 に出で、百論破常品に了因 (yanjakahetu) と相對して見出さるゝ語である。第十八節註(14)參照。

六

外曰。現有瓶衣等用故、則知一切法皆從因生。不相形故成。

內曰。¹⁾——

汝言有果故有因、此義不成。何以故、相形有故。若以見果有用故言有因者、果亦是因。果若是因、則無果。無果故則無因。是故因果俱壞。若言從意自在時方如是等因生、則是相形因。便是有爲法。有爲則無常。自在時方、相形而有、則不因成。

l̥dir smras-pa | l̥dir ⁽³⁾yan rgyu dgag-pa byas-pa-ñid-kyis l̥bras-bu bkag-paṅi-phyir cugs-kyis⁽³⁾
rgyu dan l̥bras-bu gn̥is-ka yan khas-blans-bar ḡgyur-te | rab-tu-grub-paṅi-phyir dños-po thams-cad
grub-po shes-byaḡo she-na | ⁽⁴⁾
smras-pa | mu-yin-te bl̥tos-paṅi-phyir-ro ||

l̥dir khyed-cag rñams-kyis gn̥i-ga grub-po shes gañi br̥jod-pa de-ni ma-yin-no she-na | ciḡi-
phyir she-na | bl̥tos-paṅi phyir-ro || rgyu-ni rgyu-ñid-du l̥bras-bu-la bl̥tos-nas dan | l̥bras-bu yan
l̥bras-bu-ñid-du rgyu-la bl̥tos-nas yois-su btags-te | de-ltar phan-tshun bl̥tos-pa yin-paṅi-phyir gn̥i-
gaḡan rgyu-ñid-du thal-bar ḡgyur-la | gn̥i-ga rgyu-ñid-du thal-na yan l̥bras-bu med-do || de med-
pa-la rgyu med-do || de-bshin-du ran-bshin dan | dñan-phyug dan | rdul-phra-rab dan | phyogs dan

dus la-sogs-pa thams-cad rgyu ma-yin-te | blos-pahi phyir-ro || hdi-rnams-ni mi-rtag-pa-nid-du yan
hgyur-te | blos -nas grub-pa-nid-kyi phyir-ro || byas-pa-nid-du yan thal-bar hgyur-te | de-bas-na mi-
rtag-pa-nid dan | rgyu-n-ed-pa-nid dan | byas-pa-nid-du thal-bar hgyur-te | de-bas-na ran-bshin dan |
dban-phug dan | rdul-phra-rab dan phyogs dan dusla-sogs-pa rnams mi-hgrub-te | rgyu-nid-la blos-
pahi phyir-ro ||

此處に「外人は」言へり。また⁵⁾こゝに因滅せらるゝによりて果滅せらるゝが故に、「義の」結果とし
て (samarthyat) 因果兩つながら立許せられ (abhyupagamyate) 成せらるゝが故に一切物 (bhāva) 成せ
らるゝなり。

〔論主は此に答へて〕言へり。然らず、相待するが故なり (na tv apeksāt)

此處に汝等が兩つながら成せらるゝと云へるは非なり。何故なるか、相待するが故なり。因は因性⁶⁾
(hetutva, kāraṇatva) として果に待し、果も亦果性 (phalatva, kāryatva) として因 待して施設せらる
ゝなり (prajñāpita)。かくの如く相互に相待するが故に (anyonyapekṣatva) 兩者とも因性に墮すべく
而して兩者とも因性に墮するときは更に果はなし。果無きところには因は無し。同じく⁷⁾世性 (Prakṛiti)
と自在 (īśvara) と極微 (paramāṇu) と方 (dis) と時 (kāla) 等の一切も因にあらず。相待するが故なり。
これらのものは又無常性 (anityatva) たり、相待して成せらるゝ性なるが故なり。又作「られたる」性
(kṛitavā) に墮すべく、夫よりしては無因性 (ahetutva)、無常性、作「られたる」性に墮す。夫故に世

性と自在と極微と方と時等は成せられず。因性に待するが故なり。

註

- 1、こゝにも漢譯は本文を失す。
- 2、原文は「*bd*」なるも前節のこれと同じき場合の「*pe*」にあるに倣ふて訂正す。
- 3、原文「*yi*」は「*yi*」である方正し。
- 4、原文には「*yo*」なし。意味の上より考へてある方正しと思ふ。
- 5、「因滅せらるゝによりて果滅せらるゝ」云ふ一句を中心として、の西藏譯の意味は漢譯の外人の問起中にはそのまゝ見られない。併し漢譯の「内曰」の下に「汝言有果故有因」云へるはその問起中に西藏譯の言へる所と同じ意味のものゝ述べられてあるを語るものである。西藏譯のそれは「滅」の語を以てし漢譯のそれは反對の「有」の語を以て表はされて居るが、因果雙方の成立を述べるにその何れの理趣も用ひらるゝ云ふことは、月稱中論觀和合品註に「*hetum antarena phalai yuktam iti phalasadhāvād dhetur api bhaviṣyati* (p. 405) 因無くして果は有り得べからず、果有るが故に因も亦有るべし」にて兩方の例が用ひらるゝによりても知らるべく百論破一品に「若有因必有果、無無果因」云ふも同じ。
- 6、此「因果は相待して成立し、それ自らにては不成なる」を述ぶるは四百論第二〇八偈即ち廣百論破常品第八偈に於ても同じく見らるゝ。曰く、

hbras-bu med-par rgyu-la-ni || rgyu-ñid yod-pa ma-yin-te ||
de-yi-phyir-na rgyu rnam kun || hbras-bu-ñid-du thal-bar hgyur ||

果無くして因に因性有るにあらず、夫よりして諸因は凡て果性に墮す」云。

7、「世性」は雜什譯中論の始めに韋紐天、和合、時、世性を出されてある次第が無畏註の始めに出されたるその

次第一致し、無畏註のそこに出づる「rañ-bśhin」なる語は普通「svabhāva」の譯語ではあるけれども、四百論月稱註には「三徳を體せざる自性 yon-tan gsum-gyi bdag-ñid-can-gyi rañ-bśhin」ラとして出されたるにより、此「rañ-bśhin」は數論の「prakṛti」を表はす譯語として用ひらるべく、此百字論には諸處に「自性(svabhāva)」の語出づる故に、今それと簡別する爲に「世性」なる譯語を用ふることにした。

提婆論書中此世性 (prakṛti) が物の因なることを直接遮した文は見られないが、四百論第二四〇、二四一偈即ち廣百論破我品の第一五、一六偈は、世界の起る第一原因たる作者としての三徳を體せざる世性を遮したるものなるは云ふ迄もない。大自在天に就いては百論の始に摩醯首羅 (mahāvāra) とその名が出でたるのみにて四百論にも百論にも固りその遮遣を特に論ずるものはない。

極微に對する遮遣は四百論にも百論にも處々に出て居るが、その最も纏つて見らるるものは固り四百論及び百論の破常品に於てある。その極微の遮遣は方分 (avayava) 有るを無きこの兩の場合に於て論ぜられるのであるが四百論第三〇五、三〇六即破根境品の第四、五偈下の月稱註 (mdo-hgral, XXIV, 225 a-b) に云ふ如く「その方分無きときは明白ならしむる相 (yanjakaṭva) なく、了得すべからざる (agatyā) 相あるものであるから、そこには有性 (satā) なく、さりて方分有るときは極微は八事 (astadṛavya) に待して或は前後中分に待して有分としてある故に極微性破壊せらるゝ」と云ふ此「有分」の場合の如きが、今こゝに云ふ「相待の故に自性として因に非る」を示すその場合の一例と見るべきであらう。

「方」が相待の故に自性としてあらずこの意味は四百論破常品中に見出されず百論破常品中にあり、その註釋文は全く智度論卷十(往一、六七、左)よりそのまゝ引用せられたるものである。それらの個處にはその「方」が因であるとしての説示は見出されないが、併し「方も亦果のみに於て力ある因なり (dig api kāryamātre ninitta-kāraṇam)」とはタルカサングラハ (Tarkasāṅgraha) の註にも見ゆる處であるから方が常なる因性として考へられ

たるものなるは言ふを俟たぬ。

「時」が相待の故に因として不成なりは四百論破時品の始め並びに百論破常品に於て智度論卷一(注一、一〇右左)の文をそのまま、引用して註釋せる處に出づる。

8、「無因性」は、方時等の因は常にしてそれより生ずる果は無常云ふのであるから、それらの因は果より異體(anvaya)であり、異體ならば果は無關係であり乃ち果の立場よりすればかゝる果は無より生じたものなるから、その因は因性たらないとの意味であらう。これ四百論第二一〇偈即廣百論破常品第一〇偈に述べられる處である。従つて此處に「無因性、無常性、作性」三義並べられてあるが、無因性は時方等に因たる相無きことを述べ、無常性、作性は因性として可能ならばそれらも亦無常であり、作られたるものでなければならぬを示すものである。夫故にそれらが無常性たり所作性たる限り、それらも自性として成ぜられずして又因に待するものであると終に述べられたのである。

七

外曰。我所言眞實。先舊諸仙作如是說。此法決定、終無有異。

内曰。¹⁾汝言法爾、此非正說。

如我所說、與汝法異。汝法中所有、我法中則無。我法中所有、汝法中則無。何以故。汝言、我法爾故。汝法若爾、則但自是。自是而說、則無理趣。若無理趣、則無所知。若有所知、更說勝因。若無勝因而言法爾。則無道理。

hdhr smras-pa | de-ltar-na ji-ltar bdag-cag rnam-kvris brjod-pa mi-bslu-pahi ne-bar gtag-s-pa-

las gshan-ta-ni ma-yin-no || she-na |

smras-pa | *hdod-pas yod-pa ma-yin-no* ||

hdir gal-te hdod-pas grub-par hgyur-na dehi rigs-pa spaus-pahi phyir nahi hdod-pa-las ⁽³⁾[yod-
pa gau yin-pa de khyod-kyi met-de] kyot-kyi yan yod-pa gau-yin-pa de nahi med paljo ||
cili phyir she-na | hdod-pa-las grub-pahi phyir-ro || ci-ste khyed-cag-gi hdod-pa-las grub-kyi | nahi
ni ma-yin-na de hdir mi-hdra-ba-nid-la gran-tsi-gs khyad-par-can ma-brjod-pahi phyir-te | de-bas-
na hdod-pa grub-pa ma-yin-no || ⁽⁴⁾

〔外人は〕此處に言へり。かくの如くなれば我等の説く處の如きは不虛誑(amtisā)の安立(apacāra)
より異なるには非るなり、と。

〔論主は此に答へて〕言へり。所許によりて〔成せらるること〕有るにあらず(istena nāsti)

此處に若し所許なるによりて成せられたるなりとせば、その理趣(vūktī)は捨てられたる (pari-
yaktā) ものなるが故に、我の所許中にあるものは汝の所許中に無く、汝の〔所許中〕に有るものも亦
我の〔所許中〕には無し。何故なるか、所許中に成せらるゝが故なり。若し汝等には所許中に成せら
れつゝ、我には爾らざるならんも、〔而も〕そは〔かくの如く〕⁽⁶⁾不等なる義(vaiśamya)に就いての勝因⁽⁶⁾
(viśīṣṭahetu) のその點に關して説かれたるに非るが故に、夫故に所許は成せらるゝにあらず。

註

1、本偈として出されたる卷末所掲の偈句ミは文句異つて居るが西藏譯ミの對照上意味の上より見て此は確かにその本文の出されたるものと見られる。

2、北京版は「*hdod-pa*」なれどナルタン版により「*hdod-pas*」を訂正す。

3、原文には括弧中の文句無きも漢譯に依る限りその文あるべきを至當とす。

4、北京版は「*dra*」なれど、ナルタン版によりて訂正す。

5、西藏譯には漢譯の「先舊諸仙作如是說」なる句無し。併しこは先舊諸師の説なる故にそのまま承認すべし云ふを「内言」以下に於て遮遣するのであるから、「内言」の答に於て「所許」云々の所論ある限り、これは漢譯の如き文句のある方が正しい形と思ふ。それについては次節の註に於て更に一言する。

6、不等と勝因ミの二語は、廻諍論の初分第二偈に外人の難問として、「一切諸法空ミ遮遣しながら一切諸法中に攝せらるべき言語は空ならざる故に諸法を遮遣し得ミ云ふならば、そこには不等なる義あり、又かく不等ならば不等たり得る所以の因を説くべし」にて

「*bon-te tshig de ran-bshin-bcas* || *kyod-kyi dann-bcas sia-ma nam* ||

mi-hdan-ni-de de-yin-ma || *sum-shigs khyod-par b'jod-par byos* ||」

と云ふつうに見出せる。

八

外曰。此是我家法。

内曰。¹⁾汝言我家法、其法則不成。

汝法不自成、云何能成法。若當離因者終無有所成。自是其法者此則非正理。

hdir smras-pa | hdi-ni bdag-cag-gi⁽³⁾ brda-las-so she-na |

smras-pa | brda ma-grub-po ||

hdi-ltar gan khyed-cag-gi⁽³⁾ brda ma-grub-pa-ste | ma-grub-pa-la yan ji-ltar sgrub-byed-du hgyur-te | ma-grub-pa-ni rigs-pa dan rigs-pa ma-yin-paⁿⁱ sgrub-dyed ma-yin-no || de^{hi}-phyir brda ma-grub-pa-yin-no || rigs-pa dan bral-ba-rid-kyis bstan-bcos nams-la b^{ji}od-par bya-ba yod-par smra-ba-po-ni mi-r⁽³⁾ned-do ||

〔外人は〕此處に言へり。こは我等の家法 (sainketa) なるよりず、³⁾ 也。

〔論主答へて〕言へり。〔家法の〕定むるところは不成なり (sainketo' siddhah/)。

何故なればかくの如くこゝに汝等の〔家法の〕定むるところのものは不成なり (asiddha)。已に不成なるところには〔そのものが〕云何にして成せしむるもの (sādhana) となるべき。不成なるものは道理なるもの (yukta) をも又不道理なるもの (ayukta) をも成せしむるもの (sādhana) にあらず。夫故に〔家法の〕定むるところは不成なり。理趣を離れたる義によるが故に (yuktrahitavena)。⁴⁾ 論 (śāstra) 等の中に所説ありと説く者は許されず (na labhyate)。

註

1、漢譯文中前節の本文と同じく卷末の偈に表はさるゝものこは異なるが、西藏譯この對照上意味の上よりして確かに本文として別行させ得ると思ふ。

2、兩版共に原文は「*oḥ oḥ*」であるが「*oḥ*」なる屬格の方宜しからん。

3、原文は「*śved-to*」なれど「*ḥed-to*」たるを可とする。

4、此一行の西藏文は漢譯中に無し。併し第七、八の兩節は共に外人が自らの許す所のみを以て所論成立すこ考へんことを遮するのであるから、此一行の西藏文の示す處は、彼等外人が理趣無く但その傳承する論書のみを證權として説く論者として、その許すべからざるを示す、第七、八の兩節の結論でないかと思ふ。かく見る時「論等の中に所説ありと論する者」こは第七節の始めに漢譯のみにありて西藏譯に無き「先舊諸師作如是説」の先舊諸師の所説をのみ證權とする人々を示すものでないであらうか。即ち第七節の始めに於ては失はれたりし「先舊諸師」の消息が此處に表はるゝものを見るべきである。

九

外曰。無法非因生⁶⁾。如兔角、龜毛、石女兒、虛空華等。如是無法終不可得。以因緣生、如見壓油求麻、作瓶求泥。非以二法爲因能生多法。而物各有因如泥能成瓶、不爲氈因、縷能成氈不爲瓶因。以此類求餘法亦爾。

內曰。汝言因能生者。

¹⁾ 因不能生

此因爲有所成、爲有所壞。若因有所成、成汝亦成我。若因有所壞、壞我亦壞汝。以何爲喻。

如火能燒物。燒汝亦燒我。若於彼處熱，在此亦復然。

復次更明此義。若言有因而成，成汝亦成我。因雖有所生，因法不俱成。汝立聲法是常，作要誓說。以何爲因。無身是因。以何爲喻。虛空爲喻。虛空者無身而常。以是故名聲作常。

復有異說，名聲無常。以何故。聲是作法故無常。以何爲喻。如瓶、因泥、輪、繩、人功、水等而成瓶。以作因生故，瓶無常。如聲、從唇齒喉舌衆緣生故，聲亦無常。非此二因能有所成。汝言真實其義有成，妄說虛因。理則不立。

9) 汝說要誓。有要時無誓。有誓時無要。二字不俱。要誓則壞，如因法未生，非爲因，以滅亦非因。如子未生，不名爲生，以滅亦非生。以是故無因。

gshan yan smras-pa | kha-cig-tu rigs-pa yan brijod-par bya-ste | ji-skad-du | med-pa bya-ba
ma-yin-pahi-phyir dan | ñe-bar len-pa bzun-bahi phyir dan | thams-cad-las lbyun-ba med-pahi
phyir dan | nus-pa-can mi-nus-pa med-pahi phyir dan | rgyu-ni ño-bo yin-pahi phyir lbras-bu yod-
pa yin-no || shes-bya-ba la-sogs-pa bśad-pa lta-buho ||

smras-pa | *gtan-tshigs-dag don med-do* ||

ñdir khyed-cag-gi gtan-tshigs gñi-yin-pa de gal-te bsgrub-pahi mtshan-ñid-du gyur-pa deñi tsho |
ñed-kvi phyogs kyani grub-par lgyur-ro || ci-ste sun-ñbyin-pahi mtshan-ñid-du gyur-na-ni deñi

tshé sñi-ga-la yai skyon-du hgyur-te | dper-na me-ni gñi-ga-la sreg-par byed-kyi | gcig-la-ni
ma-yin-no ||

gshan yai gal-te gtan-tshigs-las gshal-bya grub-na-ni delñi-tshe pha-rol-pos kyai gtan-tshigs
brjod-par bya dgos-te | gñi-ga hgrub-par yai mi-ñdod-de | dper-na khyed-cag-gi dam-bcañ-ba-ni
sgra rtag-ste lus-can ma-yin-pañi phyir nam-mkhal bshin-no || ji-ltur nam-mkhalñi lus-can ma-yin-
pañi-phyir rtag-pa de-bshin-du sgra yai rtag-te | de-bas-na sgra-ni rtag-par grub-po shes-byaho ||
de-bshin-du gshan yai brjod-par bya-ste | bdag-cag-gi dam-bcañ-ba hdi yin-te | sgra ni-rtag-ste byas-
pañi-phyir bunn-pa bshin-no || ji-ltar bunn-pa-ni hñin-gonñi la-sogs-pa danñ | skyes-buñi rtsol-ba-las
yai-dag-par skye-bshin-pa-ni byas-paño | de-bshin-du sgra yai rkan la-sogs-pa rnam-slas ðbyuni-
bshin-pa-la-ni byas-pa shes-byaho || de-bas-na gtan-tshigs miñ-du zad-de grub-pa-ni med-do || ðon
kyai tshad-ma-las miñ-tsam-las ma-yin-te | mi-bslu-bañi phyir-ro || hdiñi-phyir yai gtan-tshigs
-mams don med-pa yin-te |

dam-bcañ-bañi dus-su-ni gtan-tshigs yod-pa ma-yin-te | ma-skyes-pañi phyir-ro || de-bshin-du
gtan-tshigs-kyi dus-su dam-bcañ-ba yod-pa ma-yin-te | hñag-pañi chos yod-pañi phyir-ro || delñi-
phyir dam-bcañ-bañi dños-po med-pa-la hdi gan-gi gtan-tshigs-su hgyur | de-bshin-du dam-bcañ-

ba-la cig-car med-paŋi chos-can-gyi-phyir-te | gan-gi-tshe yi-ge 'pra' yod-pa delhi-tshe yi-ge 'ti'⁽³⁾
dai | yi-ge 'jñā'⁽⁴⁾ yod-pa ma-yin-no || de-bshin-du dus gcig-tu 'p' yig dai | 'r' yig dai | yi-ge
'a' la-sogs-pa nams kyaŋi cig-car hbyuŋi-ba ma-yin-no || gran-tshigs-kyi yan yi-ge nams cig-car
hbyuŋi-ba ma-yin-no || ma-skyes-paŋi bu ham ma-nin-paŋi bu yis buŋi bya-ba byed mi-nus-pa
de-bshin-du gran-tshigs nams kyaŋi don med-do ||

復次に〔外人は〕言へり。或場合には理趣も亦説かるゝなり。例へば「無(asaṭ, adhāva)は可作⁽⁶⁾
(kārya)に非るが故に、取(upādāna)は可取(upadeya)なるが故に、一切より起ること無きが故に、
非功能なる(āśakta)有功能(saktimat)は無きが故に、因は體法(bhāva, rūpa)なるが故に、果は有る
なり」云々と説かるゝが如し。

〔論主此に答へて〕言へり。因等は實義無し(hetavo vyarthah)。

⁷⁾ 此處に汝等の因(hetu, sādhana)なるものが若し所成(sādhya)の相(lakṣaṇa)たらんか、我の宗
(paśā)も亦成せらるべし。若し所難(dīṣya)の相たらんか、その時は兩者共に過失(dosa)となるべ
し。例へば火は兩者を焼くを雖も一を焼くに非るなり。

復次に若し因(sādhana)より所量(Prameya)が成せらるゝならば、爾時は反對者(para)によつても
亦因は説かれざるべからず。而も兩者が成せらるゝとは許されざるべしなり(na...isyate)。例へば

汝等の立宗 (pratipatti) は「聲は常なり、身あるものに非るが故に、虚空の如し。凡そ虚空は身あるものに非るが故に常なる如く聲も亦常なり。其故に聲は常なりと成せらる」と云ふ。同じく復次に説かるゝなり。我等の立宗は次の如し、「聲は無常なり、所作性の故に、瓶の如し。凡そ瓶は泥塊等と士夫の努力より正に生じつゝあるものなれば所作性なる如く、同様に聲も亦咽喉等より起りつゝある時には所作性と稱せらる。」夫故に因は名のみにして成せられたるものなること無し。而も「因はそれが」量 (Pramana) なるよりして「可能なるべく」、名のみよりにあらず。「因は」虚誑 (misā) なるべからざるが故なり。是故に諸因は實義無し。

9) 宗の時に因あるにあらず、未生の故なり (anutpannatvā)。同じく因の時に宗有るにあらず、已滅の法 (niruddha-dharma) は有るに非るが故なり。故に宗體 (prajñā-bhava) 無き處には、此は何もの、因となるか。同様に宗は俱時に存する無き屬性を有するもの (dharma, 有法) なるが故に、乃ち、prajñā の字有る時には、*praj* の字と、*ñā* の字有るにあらず。同様に一時に p 字と r 字と a 字等俱に起るにあらず。又因の諸字も一時に起るにあらず。未生の男子又は兩性兒によりては男子の作 (kriyā) を作し得ざる如く諸因も亦實義無し。

註

1、此句卷末の本偈と異なるれども、西藏文との對照によりて本文として別行せしめ得る。

2、西藏文中なき句であるが、作因は百論の註釋中度々了因(vyatīkrahetu；明作因)と共に用いられる「kanakalahu；所作因」であらう。

3、原文は「te」

4、原文は「dśa」

5、第六節に於て因果兩者の不成を論じ、第七、八節に於ては理趣なき單なる立宗の不成を論じ、今異解者は理趣によりて因果の成立を言はんとするのであるが、その外人の立言は漢譯の方が文章詳細であり、又意味も明瞭である。

6、kāryaの西藏語は普通 hbras-bu であるが、Nyāyabindu 索引 (Indices Verborum to the Nyāyabindu) に bya-ba なる例も三度程上つて居る。漢譯が「因生」に云へるは因より生ずるもの即ち果 (hbras-bu, phala) に云ふ意味であること知らるゝ。

7、此一項の文も漢譯の方詳細である。

8、此處の因 (of tan-tshigs || sadhana) の語は、それが所量 (prameya) に對する限り固り量 (pramāṇa) の同義異語である。廻諍論の第四六偈 (漢譯上分第二四偈) 下の註にも「汝の諸量も所量となる、諸所量によりて成ぜらるべきが故に。諸所量 (prameya) も量 (pramāṇa) となる、〔所量〕も諸量を成ぜしむるもの (sadhana) なるが故なり」と述べて居る。

因みに漢譯には所量 (prameya) に相當する語を有せない。又漢譯の「因雖有所生」に云ふに相當する西藏語は見出されない。而して此句はそれがこゝに有ることに就いて明瞭な意味を有たない。

9、漢譯には此一頁に相當する文意に頗る亂れたるものがある。先づ「有要時無誓」云々は西藏文の「同様に宗は俱時に存するなき有法なるが故に」云々の一文に相當すべく、「如因法未生」云々は西藏文の「宗の時に因有る

にあらず」云々云ふ始の文に相當するものを云はんことを如く、西藏文の「同様に一時にp字とr字」云々は漢譯に全然無く、又「如子未生」云々は西藏文の「又因の諸字も一時に起るにあらず」云々に相應することを云はんことしたるものゝ如くであるが、その漢譯文の意味の充全せざることば西藏譯と對照してよく知らるゝところである。

10

外曰。汝雖_レ被_レ因果、我説_レ有_レ我_カ法。故因果則還成。

内曰。

汝言_レ有_レ我法、以_レ何爲_レ體。若以_レ知識爲_レ我、知識則無常。知_レ瓶智以_レ滅、知_レ甌知始生。若知識非_レ我則無知。我若無知、則無_レ苦樂。如是之我則無_レ體相。若言_レ我與_レ智合₂₎故我有_レ知、知與_レ我合故、知亦非知。

hdir smras-pa | gal-te rgyu dai hbras-bu shes bya-da ma-grub mod [-kyi] | de-ta-na yai
bdag-ni grub-ste | de hgrub-paḥi rgyu dai hbras-bu-dag kyan hgrub-par hgyur-ro she-na |

smras-pa | rai-bshin brjod-par byaḥo ||

hdir gal-te bdag yod-na deḥi-tshe deḥi rai-bshin brjod dgos-so || ci-ste ces-paḥi ran-bshin
yin-par smra-na-ni deḥi-tshe | rtag-pa ma-yin-par hgyur-te | ces-pa-ni mi-rtag-pa yin-paḥi phyir-ro ||

hdir bunn-pahi ges-pa h'gags-te | snam-buñi ges-pa h'gags-te | snam-buñi ges-pa s'kyes-so || ci-ste
ges-pa-las gshan yin-pa de-lar-na-ni mi-ges-par hgyur-ro || mi-ges-pa yin-na yan stug-bñal-ba
dan | bde-ba med-par thal-bar hgyur-ro || gñi-ga smra-ba-rnams-la-ni gñi-gañi skyon-du thal-bar
hgyur-te | ges-pa sems-dan ldan-par smra-ba-rnams-kyi bdag med-pa kho-na yin-no || gañ-gi tshé
bdag sems-pa-can-du s'kye-ba deñi-tshé sems-pa dan beas-par hgyur-ro || de-lta-na yan bdag-in
ed-par yan hgyur-te | sems-pa bdag med-pañi-phyir-ro || gal-te yan sems-pa de-nid dan ldan-par
hgyur-na-ni deñi-tshé bdag med-pa-nid-du yan hgyur-te | de dan ldan-pañi phyir-ro ||

此處に〔外人〕は言へり。若し因と果と云ふは不成なるも、而も我(ātman)は成せらる。彼れ成せらるゝに因と果との二も亦成せらるべし。

〔論主は此に答へて〕言へり。自性は説かれざるべからず(svabhāvo vācyah)。

此處に若し我有るときは、その自性が説かれざるべからず。若し知(jñāna)の自性なりと云は、爾時は〔我は〕常に非るべし。知は無常なるが故なり。〔例へば〕此處に瓶の知滅し畢りて布の知生ず〔るが如し〕。若し我が知より異(anya)ならば、爾らば〔我は〕不知(ajñāna)なるべし。不知ならば苦樂は無に墮すべし。〔知と不知と〕兩者を説く場合には兩者の過失に墮す。〔我が〕思を具する(cetanāyat)知なりとの諸論には我は正に無なり。〔何故なれば〕我が有知(cañtānya)として生ずる時は我は

思を具せるなり。爾らば又我は無となる、思は我無きが故なり。若し〔我〕が彼思體を具すとならば爾時は又我は無性となる。彼〔思〕を具するが故なり。

註

- 1、本文は註釋文中に見出されない。
- 2、西藏譯ミ相對せしむるに「智」は大正藏經本も校訂せらるゝ如く固り「知」たるべきである。
- 3、知 (jñāna) は覺 (buddhi) ミ同義に用ひらるゝから此一行の文は百論破神品に「内曰。覺若神相、神無常」云ふミ同義である。
- 4、覺ある故に苦樂の感覺あり得るが覺無く (abuddhi) 不知 (ajñāna) ならば苦樂を覺するなしこの此一行の文は、百論破神品にては「若無覺者則無覺身觸不能覺苦樂」云々にて有我論者の覺を體性ミせる我の實在を證する爲に用ひられて居るから本論の用ひ方ミその立場は違ふけれども、同類の文例ミして參照することゝする。
- 5、此文漢譯に缺く。尙漢譯に「如是之我則」云々云へる「如是之」の語の代はりに、西藏譯の「知が思を具す」の論には「の句を入れてみるならば、漢譯の文脈はより明瞭になる。
- 6、「〔我が〕思を具する知なり」の論「ミは數論に於て神我の自性ミしての有知 (caitanya) の立言を示すものであらう。caitanya の西藏語は神博士翻譯名義集(458)にては「cetyod」であり、四百論破我品第九偈——十三偈の神我を破する諸偈にては此名義集のそれミ同語が用ひられてあるが、Nyāyabindu の索引には sems-pa-can ミ出で是れ本論釋にも出づるところであり、又本論釋中「sems-pa dan lan-pa」にあるのは數論偈第二〇に出づる「cetanavat」であるから又この caitanya ミ同義であるは云ふまでもない。由つて此處の一段の文章は四百論の破我品第一〇偈等の思想ミ相關係せしめて理解し得ることゝ思はれる。乃ち我の自性を「有知」ミすることゝ我の

常住性を固執すれば境の相性を分別するこゝがその自性なる有知が常に活動するこゝ云ふのであるから、火が常なる處には薪の必要無き如く有知が常なる處には境を分別する眼等の作が無功なり(第一〇偈)、此過失を避けんとして神我を有知の功能(實)とし、功能なる神我が有知の以前に有知の功能として存するこゝ云ふならば、有知に於て二重の相を分別するこゝになり、有知より異性として有知の機能を見るこゝとなり、功能の自體が顯現の自體なるこゝには、鐵と鐵の瞭解したる状態の如くであるから神我の變異を認めるこゝとなり、即ち我の無常性を認むるに至り、我の我たる性を失するこゝとなる(第一二偈)云ふのである。本論釋に表はれたるこゝは勿論此後者の場合を示すもの認められる。爾らば又我は無なる」こゝは我が有知の功能なるこゝは我無常となりて我の我たる性を失し、「思は我無きが故なり」こゝはその因故を上げて思(cetanā)は我の如き常住性なきが故であるこの意味を述べたるものであらう。

西藏譯は我が思合するならば我の不成なる點についてのみ述べて居るが、漢譯は知が我合するならばその知も不成である、即ち我合せる知は知の常性となり、知の常性は知性を失はしむこの意味を述べ。此は四百論破我品第八偈に勝論の我を遮しつゝ、「覺性なる」有知を具するによりて「實(draya)なる」我若し知者(jāṇī)ならば、夫故に「實(draya)としての非覺性なる我を具するによりて」有知も知(覺性)にあらず」(sens-pa-can dan Idan bdag kyan || gal-te ces-po-tūi yin-na || de-yis sems-pa-can sems-pa || min……) といふ所の論同じきものを見る。

一一

外曰。有_レ我。所以者何。瓶衣等物、是我所故。當_レ知有_レ我。

内曰。有一過故_一。

瓶與有二不異故。有一若瓶、非瓶^ナ有一亦應是瓶。是則多瓶。若有一非瓶、是則無瓶。

hdir smras-pa | bdag yod-de bdag-gi-paḥi dños-po yod-paḥi phyir-ro || ḥdi-ltar bdag-gi⁽³⁾ bunn-pa dan snam-bu la-sogs-pa bkag-pa ma-yin-te | de ma-bkag-paḥi-phyir bdag yod-do she-na | smras-pa | *gcig-nid-la skyon yod-do* ||

hdir gal-te bunn-pa la-sogs-pa rnam ha⁽⁹⁾ sta shig-na kar⁽³⁾ na ljig-pa-bshin-du gcig-nid yin-nani deḥi-tshe thams-cad bunn-pa-nid-du thal-bar ḥgyur-ro || gaṅ dan gaṅ yod-pa de-ni min bunn-pa dan gcig yin-no || bunn-pa shig-na thams-cad-du thams-cad ljig-par ḥgyur-te ha-sta shig-na kar-na ljig-pa bshin-no || phyin-ci-lag-par thal-bar ḥgyur-ba dan gcig yin-paḥi zlos-paḥi skyon-du yan ḥgyur-te | ji-ltar ha-sta shes brjod-na | kar-na dan pa-na-nid brjod-par ḥgyur-ba de-bshin-du | yod-pa shes brjod-pas bunn-pa dan gcig-nid brjod-parḥgyur-te | deḥi-phyir dños-po rnam gcig-pa ma-yin-te⁽³⁾ | skyon-dan beas-paḥi phyir-ro ||

此處に〔外人は〕言へり、我は有⁶⁾り、我所の物(ātmīya-bhāva)有るが故なり。何故なればかくの如く私の瓶衣等は遮せられたるにあらず。彼れ遮せられざるが故に我は有りと。

〔論主は此に答へて〕言へり、⁷⁾一性には過失有り(ekatve doṣaḥ)。

此處に若し瓶等が⁸⁾ hasta 壞せる時 karīa 壞する如く一性なるときは、爾時、⁹⁾一切は瓶性に墮すべし。凡そ有なるものは是れ名瓶と一なり。瓶壞し畢るときは¹⁰⁾一切處に於て一切壞すべし。 hasta 壞

し畢りて karia 壞するが如し。顛倒に墮入り又一なることの繰返 (avartana) の過失ともなる。凡そ hasta を云ふと karia を papa とが説かるゝに至るが如く有と謂ふによりて瓶と一性との説かるゝこととなる。夫故に諸法 (bhava) は一にあらず、過失を具するが故なり。

註

- 1、卷末の偈と同語でないが、慥かに本文の残れる形として認めることが出来る。
- 2、原文は「as」
- 3、原文の肯定文にては意味通ぜず、由つて「na」を挿入す。
- 4、5、は原文各「as-sta」「gar-na」なり。
- 6、百論破一品の劈頭に「外曰。應有神。有一瓶等神所有故」云ふもの此外問と意趣同じ。
- 7、我所實有の難破の爲に「一性には過失あり」云ふは外問と内答と一致せざるが如くであるが、こは百論破一品の始めと比較してその文脈の明かなるを見出す。蓋し百論にては外人の問起中の我の實有に對する回答は「神已不可得」にて一應完了し、而して「今思惟有一瓶」云々として一性を破することに別の所論として上げて居る今も若し此に由れば我を破することは前節にて終り、よりにて百論に於ける如く「我已不可得故」にても一應述べてそれに續く項として一性に於ては過失ありと論の始めらるべきものと解釋すべきでないか。
- 8、「hasta 壞する時 karia 壞する」こは百論破一品の今と同様の所論の下に「如因陀羅釋迦憍尸迦。其有因陀羅處則有釋迦憍尸迦」云ふと同じ程度の意味に解し得ると思ふ。
- 9、10、11、は百論破一品に一を立する論の過失を上げて「一切成、若不成、若顛倒」を次第せるものにその意味略一致する。漢譯は「一切成」こ「一切不成」の二の場合をのみ上げたものと見らるゝ。西藏譯の「顛倒に墮す

る」の次に「一の繰返さなる」云ふは破一品の「一切成」の過失の下の「復次一是數、有瓶亦是數」ニ同義であるが、此が「顛倒に墮す」の次に、又して別出せられたるは云何に。而も西藏譯のそれに續いて「凡そ *hasa* ニ謂はるゝこき」云々は吉藏註の所謂「名倒者、欲喚瓶、應喚有。欲喚有、應喚瓶」なる顛倒の釋義ニ一致すべきものであるから、こは却つて「顛倒に墮す」の釋義ニ見らるべく、此處に西藏譯の原文に於て多少文脈の亂れたるものありとすべし。

一一

外曰。有一瓶一故、有過。我今立異。捨一過故。

内曰。¹⁾

汝說異則無。瓶有無故無瓶。喻如異比丘異婆羅門。當知無比丘婆羅門。若瓶異有、則是無。如刀與鞘有異可見、瓶有一異亦應可見、今〔瓶〕有一異不可見故。異義不成。

[hidir smras-pa] ³⁾ gan-dag-gi gcig-pa-ñid de-dag-la-ni skyon hdi yod-kyi bdag-cag-ni gshan-pa-ñid-du khas-len-pahi phyir skyon hdi med-do || gshan-pa-ñid yin-na yod-pa dan gcig-pa dan bunn-pa rnam ma-hdres-pa yin-te | rdsas dan yon-tan dan las dan spyi dan khyad-par dan hdu-ba rnam tha-dad-pahi-phyir-ro || de-la bunn-pa-ni rdsas-so || gcig-pa-ni yon-tan-no || yod-pa shes-bya-ba-ni spyiho she-na ||

smras-pa | gshan-ñid-na dnos-po med-pa yin-no ||

hidir gshan-pa-nid yin-na yod-pa dai gcig-pa dai bunn-pa rnamis dnos-po med-par hgyur-ro||
cchi phyir she-na| yod-pa-las gshan-pa gzi yin-pa de-ni med-pa yin-lal| bunn-pa yai yod-pa-las
gshan-pa yin-te| de-lta-das-na bunn-pa med-do || dper-na bram-ze-las gshan-pa de-ni bram-zema-yin-
pa bshin-no || bunn-pa la-sogs-pahi tha-dad-pahi yod-pa-nid-ni ma-dmigs-te| cin la-sogs-pa bshin-no||
de-ltar-na gshan-pa-nid yin-na yod-pa dai gcig-pa dai bunn-pa rnamis dnos-po med-pa yin-no ||

〔外人は〕此處に言へり。或ものが一性(ekatva)なるときはそれらの中には此過失有りとも雖も我等は異性(anyatva)を立する(pratīna)が故に此過失無し。異性なるときは有と一と瓶等は相雜合(samīṣṭa)が實(dravya)徳(guṇa)業(karman)總(sāmānya)別(viśeṣa)合(samavāya)等差異(pīṭhak)せるが故なり。その中瓶は實なり。一は徳なり。有(satta)と云ふは總なりと。

〔論主は此に答へて〕言へり。異性なるものは物は無なり(anyatv' abhāvān)此處に異性なるときは有と一と瓶とは無體(abhāva)となる。何故なるか。有より異なるものは無なり。而して瓶は有より異なり。故に瓶は無なり。例へば波羅門より異なるものは波羅門に非るが如し。瓶〔と有と一〕等の種々なる(pīṭhak)有性は見られず(nopalabhyate)。樹等の如し。⁸⁾

註

1、本文として別出さるべき句見出されず。

2、意味の上から考へて、「瓶」の一字有るべきである。

3、漢譯及び意味の上より推して「*paṭir smras-pa*」が加へらるべきである。

4、百論破異品の初めに「外曰。汝先言_レ有一瓶異是亦有_レ過。有何等過」云へるもの今の所論と一致す。

5、漢譯は文章簡にして此一文以後に相當すべきものを見ず。

6、「有_レ云ふは總なり」は「*ṭakasaṅgraha*」の第六六節に總(*saṃānā*)について勝ミ劣の二種に分ち「勝は有性なり(*Paṭaṇi sātthi*)」云ふ處に於て見らる。

7、此一文は先の破異品の初めの外言に對する内答として先の文に次いで破異品に上げられたる處ミその所論一致す。「内曰若有等異一無」云々。

因みに此下の文に一致すべき漢譯文中「瓶有無故無瓶」は西藏譯の示す所の如く「瓶は有に異りて無なる故に瓶は無し」を解せらるべきは云ふ迄もない。

8、漢譯は西藏譯とは別なる喩を出す。漢譯の示す喩の方が詳述的にして了解せられ易し。

一三

外曰。一異雖壞、現見有瓶。喩如_レ虛空中華、無故不可見。瓶現見故、當知有瓶。

内曰。不見¹⁾

不見。汝言現見。爲眼見爲識見。若眼見者、死人有眼、亦應見。若識見者、盲人有識亦應見。若根識一一別不見。和合亦不見。喩如一盲不能見、衆盲亦不見。

ṭaṭir smras-pa | gcig-pa-nid dan gshan-pa-nid ma-grub kyai | bunn-pa-ni yod-pa kho-na yin-

te | mñon-sum-du dmigs-pahi-phyir-ro || nam-nkhaji me-tog lta-bu-ni ma-yin-te | ji-kar gain-gi-phyir
nam-nkhaji me-tog dios-po med-pas ma-dmigs-pa de-la-bur bunn-pa-ni ma-yin-te | de-bas-na bunn-
pa yod-pa yin-no she-na |

smras-pa | *hdsin-bar mi-nus-so* ||

hdar dban-po dan dban-pohj^② don yod-pahi-phyir bunn-pa yod-paho || shes gain gsums-pa de-ni
ma-yin-no || ciji phyir she-na | gain-gi-phyir hdi-dag-la hdsin-pahi nus-pa med-de | yid-la-ni mthoi-
ba med-do || gal-te yod-na-ni de loi-bas kyan mthoi-bar hgyur-ro || mig-la-ni sems-pa yod-pa
ma-yin-no || gal-te yod-na-ni yid-la-byed-pa gshan-gyis kyan de mthoi-bar hgyur-ro || szugs-la-ni
mthoi-ba dan sems-pa gñi-ga med-do || de-bas-na gzuñ-bahj^③-phyir dban-po dan dban-pohj don
grub-pa-la dgos-pa med-do ||

〔外人は〕此處に言へり。一性と異性とは不成なれども瓶は實に有り。現前⁴⁾に (pratyakam) 見らるるが故なり。虚空華の如きは然らず。凡そ虚空華は無法 (abhava) なるが故に見られざるが如く、瓶はその如くにはあらず。夫故に瓶は有なりと。

〔論主此に答へて〕言へり。取り得べからず (asakyau grahitum)

⁵⁾ 此處に根と根の境 (indriyattha) と有るが故に瓶有りとの説は非なり。何故なるか。これら (根と

根の境には取る (grāha) 功能 (sakti) 無し。意中にも見 (darśana) 無し。若し有らば彼〔瓶〕は盲人によりて亦見らるゝことあるべし。眼には心 (citta) あるにあらず。若し有らば他人の作意 (manasikāra) によりも彼〔瓶〕は見らるべし。色中には見⁶⁾と心との兩者は無し。夫故に取らるべきが爲に (grāhy-artham) 根と根の境との成せらるゝ要無し。

註

1、卷末の「五情不取塵」云へるものがこゝには「不見」出て居る。卷末の偈は偈句として充す爲に意味を加へて譯述せられたものであらう。

2、原文は單に「dhan-po」であるが終の方に出て來る例に由り、従つて又意味の上より考へて「dhan-poti」が正しい。

3、原文は「gzu-bas」なれど「bas」は誤である。

4、百論破塵品の初めは破情品との關係上その文脈は本書のこゝの部分と相違はあるが、取 (grāha) によりて物の實有を立せんとする外人の立言の意は同じい。尙その同じき立言は破一品中にも「外曰。應有瓶。皆信故。

世人眼見信有瓶用。是故應有瓶」云ひ、破塵品中には又「外曰。瓶應現見。世人信故」を再度述べられ、破情品の初の外人の立言に「定有我所。有法現前有故」を經文を出し、註に「現前知」によりて情塵意の實有を立せんとするもの亦その意又此に同じい。蓋し破情破塵の二品は、次第の如く、六根六境の實有を破せんとするものであるが、要は破情品に於ては根の知覺作用を吟味し、破塵品に於ては知覺さるゝ境の批判に向はんとするものであるから、その所論が常に、知 (jñāna) 取 (grāha) を中心とせるものなるは云ふまでもなく、此點本節

に於て「取」の不可得を論じ、取の不可得より根と境との不可得に及ぶ所論に於て要約せんとするものであらう。
5、此答に於ける註釋は漢譯と西藏譯との間に意味の一致を缺く。漢譯は眼見と識見との一々について見の不可得を論じ、眼見識見合した場合にも尙見の不可得なるを云ふ即ち中觀論の *vyasta*, *samasta* の論法に由る所論であるが、西藏譯は百論の破情破塵二品の意の要約に専らならんとする爲か根と境とに於ける取の不可得を以て始終する。又漢譯に見らるゝ *samasta* に於ける觀察無く、根境識相互の間に相互の不可得を論ずるに云ふ體裁である。

6、見とは眼即ち眼根を指す。

一四

外曰。有瓶。有色故有瓶。

内曰。1) _____

汝言有色故有瓶。色與瓶爲一爲異。瓶色若一、見餘色時、亦應見瓶。若色異瓶、瓶非可
見則無瓶。若以見爲瓶、瓶在障處、眼不見時、瓶應非瓶。若色與瓶一、瓶壞時餘色亦應壞。

hdir smras-pa | dba'i-pp dan dba'i-pohi dnos-po med kyau bunn-pa-ni mtho'i-ba kho-na yin-te |
gzugs-su bstan-pa'i-phyir-ro || ma-mtho'i-ba gzugs-su bstan-pa med-do || de-bas-na gzugs-ni mtho'i-
ba dehi bunn-pa mtho'i-ba bsln-no || sho-na |

ldi-la byod-par bya-ste | dnos-po mtho'i-ba ma-yin-no ||

hdir bunn-pa mthoñ shes gain brjod-pa de ci mthoñ-ba de-nid bunn-pa-las gshan-nam | hon-te
 gshan ma-yin | gal-te gshan yin-na delhi-tshe mthoñ-ba-las gshan gain yin-pa de-ni mi-mthoñ-bar
 hgyur-te | gshan yin-pahi-phyir-ro || ji-ltar rta-las gshan-pa gain yin-pa de-ni rta ma-yin-pa de-bshin-
 te | de-lta yin dai bunn-pa-ni mi-mthoñ-bar hgyur-ro || gcig-pa-nid yin-na yai mthoñ-ba-nid med-
 na | bunn-pa med-par hgyur-te | rtsig-pa-la-sogs-pa rnam-s-kyis bsgribs-pahi-phyir-ro || delhi-phyir gal-
 te mthoñ-ba-nid med-na yai bunn-pa med-par mi-hgyur-na | delhi-tshe de-dag gcig-pa ma-yin-no ||
 gcig-pa-nid med-pas kyau bunn-pa mthoñ-ba ma-yin-no || shes-bya-baño || mthoñ-ba shig-pas bunn-
 pa hji-g-par hgyur-te | de-la bunn-pa dai mthoñ-ba-ni gcig-paño shes gain brjod-pa de-ni ma-yin-
 no ||

「外人は」此處に言へり。根と根の對境無くとも瓶は實に³⁾見らるゝもの (distā) なり。色¹⁾として説か
 るゝが故なり。見られざるものは色²⁾として説かるゝことを無し。夫故に色が見らるゝところに瓶は見
 られつゝあるなり也。

此について〔論主によりて〕説かるべし。物は見らるゝにゆゑらず (bhavo na distāh)

此處に「瓶が見らるゝ」と云ふ時、彼見らるゝもの (distāva; 所見相) は瓶より異なるか、不異な
 るか。若し異⁴⁾ (anya) ならば爾時見らるゝものより異なるものは見られざるべし。異なるが故なり。

馬より異なるものは馬に非るが如し。かくの如くなるときは瓶は見られざるべし。⁵⁾〔若し見らるゝもの之瓶とが〕一性(ekatva)なりとせば、又、所見相(dristatva)の無きときは瓶無るべし。〔所見相の無きときは〕壁等によりて覆障せらるゝが故なり。さればとて若し所見相の無きときにも尙瓶が無とならざるならば、爾時は、それら〔所見相と瓶と〕は一に非るなり。一性なきが故に又、瓶は見らるゝものにあらずと稱せらる。〔かくして瓶が見らるゝものに非るよりして見らるゝもの(drista)との句義不成の故に〕見らるゝもの壞し畢れば瓶も亦壞すべし。〔されば〕そこに瓶と所見〔相〕とが一なりと説かるゝことは非なり。

註

- 1、本文として別行せらるべき句即ち卷末の「所見亦無體」なる偈句の表はす如き文句を見出さず。因みに先にも一言したる如く此「所見亦無體」の句の次上にある「色法有名字」の一句は西藏譯に於て此を求むれば「色」ミして説かるゝが故なり」の外人の立言中の一句ミして知らるゝのである。
- 2、原文の「dīśos-ko, (bhāva)法、有、物」は前節に於ては「don (artha)義、境」の字にて表はれて居る。
- 3、漢譯に所謂「色」の辭は西藏譯中にも「色」の辭の示されてないではないが、「内言」下の註釋中の用ひ方から見ても、西藏譯中の「見らるゝもの(所見相)」が漢譯に於ては色の辭を以て表はされて居ることが判る。
- 4、漢譯は此處に瓶ミ色ミの一なる場合が一度出されて居る。然るにそれにて完ふせず、次に異なる場合が出され更に一なる場合が出て居るのであるから一なる場合が二度出された譯である。

5、此文は勿論漢譯に相當するものであるが、但漢譯にては「見らるゝもの」即ち「所見」或は「可見」でもあるべきものが單に「見」のみ出されてあることに注意を要する。西藏譯に由る限り「若此見爲瓶」云々からが始めて瓶ミ所見相即ち色ミの一相を論ずる項なのである。

6、以下の西藏譯に相當すべき漢譯は見られない。但、「若色與瓶一」云々の一文は西藏譯に於て此を當てれば「見らるゝもの壞し畢れば瓶も亦壞すべし」云ふに相當せしめ得る。

一五

外曰。我ガ法不生不滅。見亦不壞。不見亦不壞。何以故。我法常有故。因中有果、微細不現。以先有故、後得成レ大。以是故、知有因果。

内曰。¹⁾先有不須レ作

⁷⁾如泥有瓶不須レ陶師、如縷有蠶不須レ織師。以瓶ト待ト工匠成故。知因中無果。若因中已有果者、則無未來法。若無未來法、則無生滅。無生滅、亦無善惡。無善惡、亦無作業罪福果報。如是則一切法無。

復次若因中先有微細果、而無レ麤者、是麤便先無而後有。是則生滅。違汝先說。¹¹⁾又若微細先有、則非レ生法。非生法故、則壞三世。三世若無、常知一切法亦無。若因中先有果、乳中已有酪。若言先無而後有者、當知是作法。以是故、一切法因中先有、更不須レ作。

mthou-ba-las ljig-pa dan skye-ba med-do || shes-bya-baho || hon kyan gai hdi-la skye-ba shes hdsin-
pa-ni rgyu-las phra-baḥi bdag-nid-du yod-paḥi-phyir byed-pa yin-no || rgyu yod-paḥi-phyir yai ḥbras-
bu yod-pa yin-te | yod-pas deḥi-phyir mthou-ba-la ljig-pa dan skye-ba med-pa shes-byaho she-na ||
smras-pa | *yod-pa-ni bya-da ma-yin-no* ||

ḥdir gal-te skye-ba dan ljig-pa med-pa yin-na deḥi-tshe thag-pa la-sogs-pa rnamś med-par
ḥgyur-ro || gal-te snam-bu la-sogs-pa yod-pa yin-na deḥi mā-ḥoḥs-pa med-par thal-bar ḥgyur-te |
yod-paḥi phyir-na yod-pa yai ma-ḥoḥs-pa-nid-du ji-lar ḥgyur || ljig-pa med-paḥi-phyir yai chos
dan chos-na-yin-pa-dag med-par ḥgyur-te | ḥdir chos-na-yin-pa shig-pa-ni chos-su ḥgyur-la | chos
med-pa yai chos-na-yin-pa [yod-pa ma] ⁽²⁾ yin-shin bya-ba yai med-par ḥgyur-ro || de med-na
thams-cad med-par ḥgyur-te || deḥi-phyir skye-ba dan ljig-pa-dag ⁽³⁾ gdon-mi-za-bar khas-blan-bar
byaho || de-lar-na bya-ba yai yod-de | deḥi-phyir yod-pa bya-ba ma-yin-no ||

gshan yai gal-te rgyu-la ḥbras-bu phra-baḥi bdag-nid-du yod-pa [yin-na-ni] ⁽⁴⁾ de-nid-kyi-phyir
ḥbras-bu med-pa yin-no || rags-pa-nid med-paḥi-phyir-ro || hdi-ltar phra-baḥi gnas-skabs-na deḥi
phra-ba-nid-kyi hdi-ltar de-la rags-pa-nid med-de | deḥi-phyir med-pa skye-ba dan | chos shig-na yai

chos-ma-yin-par hbyuñ-bar hgyur | gal-te skye-ba dan ljig-pa-ñid med-na | dehi-tshe hdas-pa dan mar-
 hois-pa yai med-par hgyur-la | de-dag med-pañi phyir da-ltar-byuñ-ba yai med-do || gal-te hdas-
 pa dai ma-hois-pa med-na da-ltar-byuñ-ba hdi gañ-gi yin | hdas-pa dai ma-hois-pa dan da-ltar-
 byuñ-ba med-pañi-phyir thams-cad med-dar thal-bar hgyur-ro || hñiñi-phyir yai hbras-bu med-par
 smra-ba yin-te | gal-te ho-na shes-bya-bahi rgyur-la sho shes-bya-bahi hbras-bu yod-pa shes-bya-ba
 de-lta-na-ni de skye-bar mi-hgyur-te yod-pañi-phyir-ro || de-bas-na sho-ni med-pa kño-na skye-bar
 hgyur-te de-lta-na met-pa hbras-bur thal-bar hgyur-ba de-bas-na yod-pa-ni bya-ba ma-yin-no ||

〔外人は〕此處に言へり。我等〔の見解〕によれば〔有(sat)なるが故に何ものも壞(vināśa)せず、生
 する』云(utpāda)無し。それ故に見らるゝものに於ける壞と生とは〔實には〕無し』と云はるゝなり。
 而も亦此處に「生ず」と知る』云(grahaṇa)〔ある〕ば、因中に微細の自性(sūksma-svabhāva)として有
 るが故に〔彼生は〕作(karāṇa)なり。因有るが故に果も亦有るなり。有なるが故に夫故に、見らるゝ
 もの(dhīṣṭā)に於ける壞と生とは〔實には〕無しと稱せらるゝ。⁷⁾

〔論主は此に答へて〕言へり。有は所作にあらず(bhāvo na kriyā)。

⁷⁾ 此處に若し生と壞とが無ならば、爾時は、織師等のものも無なるべし。若し織物等〔現に〕有(sat)
 なるときは、その未來〔相〕は無となるべし。〔現に〕有なるが故に〔現に〕有なるものは更めて云何

にして未來相 (anāgamatva) となるべき。又壞 (vināśa) 無き⁸⁾に由りては法 (dharma) と非法 (adharma) とも無となるべし。〔實に〕此處に非法の壞し畢れるが法たるべきに、法無きときは又非法は有るにあらず、所作 (kriyā) も亦無かるべし。彼れ無きときは一切無なるべし。されば生と壞とを畢竟じて (avaśyam) 許さるべからず。爾れば所作 (kriyā) はあり。夫故に有は所作にあらず。

復次に若し⁹⁾因中に果が微細の自性 (sūkṣma-svabhāva) として有るときは夫故に果は無なり。麁性 (sthūlatva) 無きが故なり。何故なれば微細の分位 (avakāśa) に於ては、彼〔因中果として存する〕もの微細性 (sūkṣmatā) なるも、かくの如くしてそこには麁性無し。夫故に〔因中には〕無 (asat) 〔なる麁性〕の生ずることゝなり、又法が壞するときは非法として起ることゝなる。若し生と壞とが無なるときは、爾時は過去 (atīta) と未來 (anāgata) も無となるべく、それら〔過去と未來〕の無なるが故に現在 (vidyamāna) も亦無し。若し過去と未來と無くば此現在は何れに屬するか。過去、未來、現在無き故に一切無に墮すべし。又次のことの爲に無果論 (śūnyatā) なり。〔何故なれば〕若し「乳と云ふ因中に酪」なる有果 (satkārya) 〔論〕と云ふことならば、爾らば彼〔酪〕は生ずるに非るべし。〔既に〕有るが故なり。夫よりして〔酪の生ずると云ふ點より云へば〕酪は無なるものが正しく生ずることゝなる。かくの如くならば無 (asat) が果 (kārya) となるが故に夫故に〔因中先に〕有なるものは所作 (kriyā) に非るなり。

註

1、卷末の「以有不須作」なる偈によりて見るに、此處のこの一句は本文として認めることが出来る。

2、漢譯により「yud-pa ma」の句を挿入する。

3、北京版にては「adon」の「e」失したり。

4、ナルタン北京兩版共に原文は「bya」なるも漢譯にて訂正。

5、原文には「yin-nam」なをも「gal-te」に對する時はこれあるを正しとする。

6、漢譯の「見亦不壞不見亦不壞」即ち「壞が見らるゝも亦實には壞せず、見られざるも亦壞せず」云ふにては生壞兩方の場合に述べらるべきものが、「壞」に關してのみ述べられて居り、かゝる場合の文脈として頗る異なるものであるからこは勿論西藏譯の云ふ方を自然とせねばならぬ。

7、此處の一文は漢譯の方詳細である。こは總じて因中有果論を破するのであるが、漢譯にては因中有果を破しつゝ、所作 (kriya) を成せしめんが爲には「知因中無果」にて因中無果を立するがやうであり、西藏譯も本節の終に於て「次のこの爲に無果論なり」にて同様の立論をして居る。併し因中有果と共に無果をも破するのが中觀學の所論であるから、「知因中無果」云ふても、此は因中無果論の立宗では固り無く、所作 (kriya) を成せしめんならば因中有果であつてはならないこの空無自性的論理を示すものを見なければならぬ。かゝる所論の傾向は百論破因中有果品にも度々見らるゝ處である。

8、この所論は、百論破因中有果品第七の始めに數論の轉變説即ち因中有果論として三項に互る外人の所立あり、それに對する論主の論難あり、而してその第三項の論主の論難中「復次若有不失無失」云ふ修妬路以下に述べられて居るのと同じ。

9、百論破因中有果品に「内曰、若先有微形、因中無果」云ふ修妬路及びその下の註の示すのと同じ。

10、此文は、次に因は微細性なるに拘はらず果として是因中に無なる麁性生ずるを述ぶる如く、因中に無なるものが生ずるのであるから、善悪因果の關係が破壊し、前刹那に善法壞し、それを因として後刹那に非善法起ることをなるこの意味であらう。漢譯には此に相當する句が見出されないから以て參考をなし得べくもない。11、漢譯の如く「又若微細先有」を前提して述べる方が此處の理趣は更に明瞭に表はさる。因みに因中有果論が三世を壞するこの所論は百論破因中有果品に「内曰若因果一無未來」及びその下の註釋にも出づる。

一六

外曰。若因中先有果、是過者、今說因中先無而後果生、離無生滅。是故無過。有生滅故、亦有亦無。

内曰。1)

無生有生非一時故。若瓶泥中已有、不須輪繩人功等成。若無、如龜毛、不可紡織令使用。以是故、有亦不生。無亦不生。

又受身爲自生、從他生。二俱有過。若自生、更何用生。以是故、自生無身。若不從自生、云何而從他。若言自他生、是亦俱有過。以是故、一切法無生。

hidir smras-pa | gañ yañ hbras-bu yod-par smras-pa | de-dag-la skye [-ba dan̄ hjiḡ-pa] med-par
thal-bas-ñes-par hgyur mod | gañ yañ hbras-bu yod-pa dan̄ med-par smra-ba de-dag-la skyon
med-la | hdi khas-bhans-pa-las don gñi-ga grub-cin | de grub-pahi phyir yañ hbras-bu yod-pa dan̄

med-par hgyur-ro she-na |

smras-pa | *de-dag-la* *skye-ba* *ma-yin-no* ||

hdir yod-pa-ni skye-ba ma-yin-te yod-pahi-phyir | hdi-ltar yod-pahi bunn-pa hjin-gon la-sogs-
 pa rnam-s-kyis bskyed-par byed-pa ma-yin-no || med-pa yan ⁽³⁾skyed-par byed-pa ma-yin-te med-pahi-
 phyir-ro || tha-ga-pa ⁽⁴⁾la-sogs-pas ruis-sbal-gyi spuhi ⁽⁵⁾gos skyed-par byed-pa ma-yin-te | med-pahi-
 phyir-ro || de-ltar yod-pa dani med-pa skye-ba ma-yin-no || skyes-pa-ni skyes-pahi-phyir mi-skye-
 la || ma-skyes-pa yan ma-skyes-pahi-phyir mi-skyeho ||

gshan yan skye-ba gan yin-pa hdi rai-las sam gshan-las hgyur grai-na | gñi-ga yan skyon ⁽⁶⁾
 yod-do || ma-skyes-pa-la rai-gi btags-ñid med-na ji-ltar rai-las skye-bar hgyur || ci-ste vod-pa [yin-
 na] de-lta-na yan yod-pa-la-ni skye-ba yod-pa ma-yin-no || de-ltar re-shig rai-las ⁽⁷⁾skye-ba ma-
 yin-no || gshan-las kyai skye-ba ma-yin-te | skyes-pa-las gshan-du gyur-na | gan-las gshan-las skye-
 -ba med-pa-las ci-ste yod-pa-las gshan mi-skyeho || ci-ste yod-med gshan-las mi-skye-ste | gñi-gahi
 skyon-du thal-pahi-phyir-ro || de-ltar yod-pa dani med-pa dani yod-med-ni rai nam | gshan-las skye-
 bar mi-hgyur-te | skye-ba med-pas thams-cad med-do ||

〔外人は〕此處に言へり。實に有果 (saktiṛya) の説かれたる處には生壞無に墮するが故に過失とな

ると雖も、果有り亦無し (satasaktāya) と説く處には過失無し。かく許すところには (abhyupagām-
yamāne) 兩義成立し、それ成立するが故に又果有と無となるなりと。

〔論主は此に答へて〕言へり。それらには生無し (tesāin nopattiḥ)

⁸⁾ 此處に有 (sa) は生ずるにあらず。〔現に〕有るが故なり。何故なれば〔現に〕有る瓶を〔人は更に〕泥塊等を以て生ぜしむるにあらず。無 (asau) なるものも亦人それを生ぜしめず。〔現に〕無なるが故なり。織師等は龜の毛の織物を生ぜしむるにあらず。無なるが故なり。かくの如く有と無とは生ずるにあらず。已生 (utpanna) は已生の故に生ぜず、未生 (anutpanna) も亦未生の故に生ぜず。

復次に生なるものは是れ自より (svatas) なるか他より (Paratas) なるか。兩者共に過失有り。未生なるものには自體相 (svātmatva) 無ければ云何にして自より生ずべき。若し有なるものならば爾らば又〔現に〕有なるものなればそこには生あるにあらず。かくの如く且らく自より生ずるにあらず。又他よりも生ずるにあらず。已生なるところには、〔彼已生のもの〕より他となれるものあらんも、凡そ他となれるものより生ずるとき、そは無より〔他なるときにも〕若くは有より他なるときにも生ずるにあらず。若し有無なるときにも他より生ぜず。兩者の過失に墮するが故なり。かくの如く有と無と有無とは自又は他より生ずるにあらず。生なきが故に一切は無なり。

註

1、卷末に出づる如き「彼法無有生」ニ同等なる本文の特に來らねばならぬことは註8に述ぶるが如し。

2、原本には「med-pa」のみあるも始めに「yod-par」がある例に倣ひ「par」があるべきを正しけり。

3、原本には「skye-bar」があるが、Indices verhorn to the Nyāyahindu, by Obermiller にて「skyed-par byed-pa」の例は屢見出せるが、skye-bar byed-pa の例は無く、次上次下の文例によりて見るものは「skyed-par byed」たるべきを要する。

4、原本は「tha-ga」であるがエシユケ藏英辭典によりて「pa」を添加する。

5、原本は「pu-la」であるが「pu-hi」であらう。

6、c.ise に相對して yin-na の加はるべきを欲ふ。

7、原本は「a」なるも固り「as」たるべきである。

8、漢譯には「無生有生非一時故なる一文があり西藏譯にはそれが見出されない。その意味は「有にして又無なるものは相互に相違せるものなればかゝる有にして又無なる句義が一時に認めらるゝなく、從つてかゝるものが生ずること無し」を謂ふのであらうから、こは此外人の立言をその有無一々に就いて「若瓶泥中有」若無」を伺察する爲の總破ともなるべきものであらう。併しそれにして此一行は因(ig)の形で表はされたものであるから此一行の文の意味が正しく顯はれんが爲には「内曰」の下に是非も「彼法無有生」たる卷末所掲の偈と同じ意味を表はす句が入れられてあらねばならぬのである。かく解する時に外人言の下の「亦有亦無」云へる結語が生きて來るのであり、かく解することには中論(羅什譯)觀因緣品第七偈の「亦非有無生」、觀三相品第二偈の「有無亦不生」、及び七十空論第四偈中の此と同内容の語の所論の裏付ける所なのである。その「有にして又無なるもの生ず」は、生じつゝあるもの (upadyanana) 即ち「半ば有にして半ば無なるもの生ず」の意味なのであるから、漢譯の外人立言中の「因中先無而後果生」云ふ語もかゝる生時云ふやうな意味であること

を豫期せねばその内容が不明瞭に終るのである。

9、自生他生の問題は中論觀因緣品第一偈以來至る處に出づることは云ふ迄もないが、百論に於ては固り破因中
有果無果品に於て求むべきであり、破因中無果品に、その詳論は破吉中已説きて百論捨罪福品中の所論に譲り
て此を關説して居る。

10、漢譯の身とは「體相」に云ふ如き意味なのであらう。

一七

外曰。若無身不應有生住滅有爲三相。若有有爲、則有無爲。有爲無爲成故、一切法亦成。

内曰。無有爲法¹⁾。

汝言三相、爲次第生、爲一時生。次第亦有過。一時亦有過。若次第生、生時無住滅。住時無生滅。滅時無生住。以是故不得次第生。又若生有住、生自無體、住何所住。生體自無、住云何有。無生無住、如石女兒。是則無法。若有生住、爲滅所滅。生住既無。滅何能滅。如壞兔角、空有壞名。外曰。汝言生住滅次第不可得。有爲相如二頭三手不可得、三相亦不可得。若三相一時、亦不可得。何以故。若生中有滅、生則非生。若滅中有生、滅則非滅。住中生滅、破亦如是。生滅相違、云何一時。以是故、三相次第生不可得。一時生亦不可得。

又汝言三相、爲與有爲作相。爲與無爲作相。若與有爲作相、生是有爲、應有三相。住滅亦爾。如是之相、則爲無窮相。若無窮、汝不應說有爲法但有三相。要誓則壞。若相相無爲、云

何有爲相而能相無爲⁹

l̥dir smras-pa | gal-te skye-bar mi-ḡgyur-na delhi-tshe ḡdus-byas-kyi mtshan-n̄id med-par ḡgyur-
te | ḡdus-byas-ni skye-ba dai gnas-pa dai ḡjig-pa rnam-s-kyis m̄ion-par gsal-bar byas-paḡo || delhi-
phyir ḡdus-byas-ni yod-pa-ste de yod-paḡi-phyir thams-cad ḡgrub-par ḡgyur-ro || she-na

smras-pa | *ḡdus-byas med-do* ||

l̥dir khyod-kyis ḡdus-byas-su m̄ion-par b̄jod-pa gañ yin-pa delhi mtshan-n̄id skye-ba dai
gnas-pa dai ḡjig-pa rnam-s-ni rim-gyis yod-pa ma-yin-shin cig-car yañ ma-yin-te | ḡdi-ltar gañ-gi-
tshe skye-ba delhi-tshe gnas-pa dai ḡjig-pa med-pa | de-dag med-na skye-ba gañ-shig yin | gañ-
gi tshe gnas-pa med-pa delhi-tshe skye-ba gañ-gi yin | gañ-gi tshe gnas-pa med-pa delhi-tshe
skye-bar ḡgyur-ro shes-bya-bar mi-rigs-la | skye-ba med-na gañ-gi gnas-par ḡgyur || gal-te skye-
ba med-par gnas-par ḡgyur-na delhi-tshe mo-ḡam-gyi bu la-sogs-pa rnam-s kyai gnas-par ḡgyur-
ro || r̄tsod-pa-po-las ⁽⁴⁾ b̄jod-par bya-ste | m̄go gn̄is-pa lag-pa gsum-pa-dag ma-skyes-pa yañ ⁽⁴⁾ ciñi-phyir
gnas-pa med | ḡdi-ni ḡdod-pa yañ ma-yin-te | de-bas skye-ba dai gnas-pa dai ḡjig-pa rnam-s rin-
gyis ḡbyun-ba ma-yin-no || cig-car yañ ma-yin-te | ḡdi-ltar skye-baḡi dus-na ḡjig-pa dai gnas-pa
med-laḡ | ḡjig-paḡi dus-na yañ skye-ba dai gnas-pa med-ciñ | gnas-paḡi dus-na yañ skye-ba [dai]

ljig-pa-dag med-pas-na cig-car hbyun-ba-ni yod-pa ma-yin-no || dus gcig-pa yin-na skye-ba dan
hchi-ba-dag gcig-tu hgyur-te | hdi-ni hdod-pa yai ma-yin-no || dehi-phyir hdi-dag rim-pa dan cig-car
du hbyun-ba med-do ||

gshan yai | gal-te hdus-byas-kyi mtshan-nid gsum yin-pa de-lta-na thug-pa med-par thal-bar
hgyur-te de-la yai gshan dan gshan yin-pas thans-cad-du gsum-nid hbyun-bar hgyur-ro || dehi-
phyir skye-ba-la skye-ba dan gnas-pa dan ljig-pa gsum-du hgyur-la | de-bshin-du gnas-pa dan
hjis-pa-dag-la yai sbyun-bar byaho || thug-pa med-par thal-bar hgyur-ba yai hthob-ste | de rnam
kyan gshan yai | gshan-gyi nus-pas skye-ba dan gnas-pa dan ljig-par thal-bar hgyur-ro || de-
bas-na skye-ba dan gnas-pa dan ljig-pa rnam-la re-re-la gsum gsum-du hgyur-ro || de-lta ma-
yin-na hdus-byas ma-yin-par thal-bar hgyur-ro || de-las ma-gtogs-pa gshan hdus-byas-nid-ni yod-pa
ma-yin-te | dehi-phyir hdus-byas mtshan-nid gsum-paho shes gan b-jod-pa hdi dam-bcah-ba rnam-
par thal-bar hgyur | de-bas-na hdus-byas-ni med-do ||

〔外人は〕此處に言へり。若し生ぜらるんか爾時は有爲の相 (sainiskrita-lakṣaṇa) 無なるべし。然る
に有爲は生 (utpatti) 住 (sthit) 壞 (bhanga) によりて明示せられたるものなり。夫故に有爲は有^り。そ
れあるが故に一切は成立せらるべし。

〔論主は此に答へて〕曰へり。有爲は無し (saṅskṛito nāsti)

此處に汝が有爲として説示せるものゝ相なる生と住と壞とは次第を以て (kramena) 有るにあらず俱俱 (yugapad) にもあらず。何故なれば〔若し次第によりて有る時は〕生の時、住と壞とは無く、その二無なるときは生とは何ものなるか。住無なるとき生は何ものゝ〔生〕なるか。住無なる時は、生ずとは道理にあらず (na yuktam)。生無きときは何ものゝ住なるべき。若し生無くして住あらんか、爾時は石女の兒等も生ずべし。諍論者 (vivādin) に所説あり。第二頭第三手等不生なるものは更に何の爲に〔も〕住無し。こは許さるゝところ (śūta) にもあらず。夫故に生と住と壞とは次第を以て起るにあらず。同時にもあらず、何故なれば生の時に壞と住とは無く、壞の時にも亦生と住とは無く住の時にも亦生壞の二無きが故に同時に起ることも有るにあらず。一時のものなれば生と死とが一時にあるべし (janmamaraṇāni tulyakālam)。而もこは許さるゝところにあらず。夫故にこれら〔三相〕は次第と同時に起ること無し。

復次に、若し有爲の相三ならば爾らば無窮 (anavastha) に墮すべし。而してその場合〔三相〕は異なる故に全てに三性起るべし。夫故に生に生住壞三となり、同じく住と壞とも又爾かく適用せらるべきなり。又更に無窮に墮することに到達す、即ちその諸のものは又他のものゝ功能 (gati) によりて生じ住し壞するの結果となるべし。夫故に生と住と壞との各に (pratyakam) 三々あるに到るべし。

し。爾らずしては有爲に非ることに墮す。それに異りて (trad. vyāhṛtkeṇa) 別に有爲性有るにあらず。夫故に有爲は三相 (trīśakāṇa) との説は是れ立宗 (prāṇīna) の破壊に墮するなり。夫故に有爲は無し。

註

1、此句は慥かに註釋中引用の本文を認め得る。

2、漢譯は雜什譯中論觀三相品第三四偈「生住滅不成、故無有有爲、有爲法無故、何得有無爲」に示さるゝ如き有爲空無爲空を顯示せん爲の外人の問起である。西藏譯に於ては無爲空に關する説は正しくは次下第一八節の所論であつて今は有爲の三相のみに關するものであるが、漢譯がこゝに有爲空と共に無爲空を談じて次節との關係を説明せんとしたるは中論三相品の彼偈に注目する限り頗る良しきを得たるものと見ねばならぬ。併し、有爲の三相は有爲法を相するものとして設けられたこと云ふことは明瞭な事柄であり、その相する能相の三相が有爲法として相せられねばならぬならば、他の有爲相を要し、かくして無窮に墮する故に、その過失を避けんとして三相を無爲なりと立せんことは觀三相品の始めに現はれて居るが、本節の漢譯の終に於ける如く「若し三相が無爲を相せんか」云ふ如き條件文は「有爲の三相」を論ずる處としては寧ろ無意味なる附會であり問起中の無爲への關説に相應する爲にもならぬ。

3、此下漢譯はその所論の形式西藏譯とは少しく異り、又西藏譯に無き滅に關する一文が別に加へられて居る。概して此下は漢譯の方が文章整ひたりと見るべきか。

因みに百論破因中無果品に生三時(初中後)に就いて論じつゝ、その初中後の三時を生住壞に類比して語らんとする外言に對し、その三相の批判をせる邊は目下の所論と同じ。

4、[trīśod-pa-po-āṅs]の las が la 即ち業格或は爲格で「評論者の爲に説くべし」かとも考へて見たのであるが漢譯

が「外日」にせる邊は諍論者に對するものでなくして諍論中の所論なりと見るべきであらう。又「ānuphyir (kim arham) が saṅgaphyir (yad arham) であり度いのであるが云何なものであらうか。何れにしても此二行の文に對しては尙決定相に到達し得ざるが如くである。

一八

外日。汝若不欲令作有爲相、應作無爲相。何以故。無爲遍一切處、無方所故。是故應與無爲作相。

内日。無爲有方所²⁾

我今問汝。虛空爲有方所、爲無方所。虛空若有方所、應在汝身邊¹¹⁾亦在彼身邊。若爾便是有分。有分則有邊。若言虛空無方、爲汝身遍虛空、虛空遍汝身。若虛空遍汝身、汝身遍虛空、是則有邊際。如瓶衣氈等。有邊故無常。虛空爾者亦是無常。

又復常因能生常果³⁾。因若無常、果云何常。如因泥生瓶、泥無常故、瓶亦無常。有方所故、名爲無常。

又復汝所言常、有因故常、無因故常。二俱有過。若言從因生是常者、如瓶衣等物、從因生、故皆亦無常。汝若以離¹³⁾因生法、是常、我亦以離因生法、是無常。若必有離因生法、而常者、爲是稱理言爲是偏黨說。今應分明更說其因。

外曰。因有二種作因，了因。從作因生，是無常。如瓶衣等。物作因生故，無常。從了因法是常。如燈能照闇中衆物，闇去物現。非作法故是常。以是故，從作因生者，是無常。從了因生者是常。

內曰。如瓶等物，現見故是有。無爲非現見故是無。何以故，無爲無體相故無法。捨有捨無，二俱捨故，能斷我見及我所見，便得涅槃。如經中說。

如智境。見一切法空，識無所取故，心識滅。種子滅。

hdir smras-pa | hdus-byas bkag-pahi-phyir hdus-ma-byas khas-blais-la de khas-blais-bahi
phyir hdus-byas hgrub-stel | thams-cad-ni zla-bo⁽⁹⁾ yod-par dmigs-te | ji-ltar sdug-bsnal dan bde-
ba dan chos dan chos-ma-yin-pa dan gran-ba dan dro-ba bshin-te | de-bshin-du hdus-byas dan
hdus-ma-byas kyau yin-par bya-stel | de-bas-na hdus-ma-byas grub-pahi-phyir gñi-ga grub-po ||
hdus-ma-byas thams-cad-du hgro-ba dan | rtag-pa dan phyogs dan bral-ba nams-so she-na |

[smras⁽⁹⁾-pa |] *phyogs gñi-ga-tsam-mo* ||

hdir gal-te bdag dan | rdul-phra-rab dan nann-nkhah dan dus dan phyogs la-sogs-pa-dag-gi thams-
cad-du hgro-ba-nid dehi-tshe hdi-la dir-bar-byaste ci khyed-cag-gi bdag hdi lus-la phyogs gcig-
gis gnas-sam | hon-te ma-yin || bdag-nid thams-cad-kyis gal-te phyogs gcig-gis-so she-na | dehi-

tshé phyogs gcig-pas rnan-par gnas-paḥi-phyir phyogs gcig-pa gshlan rnamskyis kyañ hgyur-
 bar bya dgos-so || phyogs dai bcas-paḥi-phyir yañ mi-rtag-pa-nid de ḥdi-ḥtar gan phyogs-su ḥjug-
 pa de-dag-ni mi-rtag-pa-stc | dper-na bunn-pa la-sogs-pa lta-buḥo || ci-ste bdag-nid thams-cad-kyis
 lus-la gnas-na-ni deḥi-tshé phyogs thams-cad-du ḥgro-ba-nid kho-nalḥi lus-la yois-su rdsogs-pas
 deḥi-phyir phyogs gcig-tsam-du thal-bar ḥgyur-ro || de-bshin-du thams⁹-cad [-du ḥgro-ba-nid]
 bkag-pas thams-cad-du ḥgro-ba dai rdul-phra-rab la-sogs-pa gan-dag yin-pa de-dag rtag-pa daiñ |
 thams-cad-du ḥgro-ba daiñ phyogs daiñ bral-ba rnamskyis gcig daiñ bcas-pa-nid-du ḥgyur-te |
 lus phyogs daiñ bcas-paḥi-phyir ḥdi rnamskyis daiñ bcas-pa-nid-du thal-bar ḥgyur-ro ||
 yañ rtag-pa rnamskyis rgyu-las-sam | rgyu med-pa-las ḥgrub-par ḥgyur | des cir ḥgyur she-na |
 gñi-ga-la yañ skyon yod-de | gal-te rgyu-las yin-na deḥi-tshé mi-rtag-pa-nid-du thal-bar ḥgyur-te |
 rgyu-las skye-ba yin-paḥi-phyir bunn-pa la-sogs-pa bshin-no || ci-ste rgyu-med-pa-las-so she-na |
 de-ḥtar-na yañ nes-pa-med-pa-nid-du thal-bar ḥgyur-te | rgyu med-pa-dag-ni yul daiñ dus daiñ ran-
 bshin nes-pa-med-paḥi-phyir-ro || dios-po med-pa-nid-du yañ thal-bar ḥgyur-te | mo-bcam-gyi bu
 la-sogs-pa bshin-no || ci-ste khyed-cag-gi tshig-tsam-gyis grub-kyi bdag-gi-ni ma-yin-na | ḥdir bye-
 prag-gis gstan-tshigs brjod dgos-so ||

ci-ste rgyu-ni rnam-pa gñis-te byed-pa dan | gsal-baḥo || de-la gau-dag byed-paḥi rgyus bskyed-
 pa de-dag-ni rtag-pa ma-yin-te || ji-ltar bunn-pa la-sogs-pa bshin-no || gau-gis gnas-bshin de-dag-
 nid-kyi[s] mñon-par gsal-bar byed-kyi bskyed-pa ma-yin-pa de-ni gsal-bar byed-paḥi rgyu-ste |
 ji-ltar sgron-ma dan nor-bu la-sogs-paḥi ḥod Ita-buḥo || de-la byed-paḥi rgyus-ni mi-rtag-pa-nid-du
 ḥgyur-la | ma-byas-pa rnamis mñon-par gsal-bar byed-pa-dag-gis mñon-par gsal-ba ḥbaḥ-shig-du
 zad-kyi bskyed-pa-ni ma-yin-no || yau gau-dag sbye-ba de-dag-ni rtag-pa ma-yin-te | chos mi-mthun-
 pa-ni gau-dag mi-skye-ba rgyus mñon-par gsal-ba ḥbaḥ-shig-pa de-dag-ni rtag-paḥo || de-bas-na
 chos mi-mthun-paḥi-phyir byas-pa-ni rtag-pa ma-yin-no || shes smraḥo [she^(s)-na] ||

de-ltar-na-ni ḥo-na byas-pa yod-pa-nid-du mthou-bas | chos mi-mthun-pas ma-byas-pa rnamis
 med-pa-nid-du ḥgyur-bas rtag-pa rnamis don med-do || de-ltar ḥdus-byas dan ḥdus-ma-byas yois-
 su brañ-ba-las ñar-ḥdsin-pa dan ña-yir-ḥdsin-pa-dag rab-tu spais-pa yin-la peḥi-phyir mya-ñan-
 las ḥdas-so || de gsuis-pa |

ges-pa rten med mi-ljung-ste ||

rnam-ges ḥgags-par gyur-pa-yis ||

srid-paḥi sa-bon ḥgags-par ḥgyur ||

〔外人は〕此處に言へり。有爲は遮せられたるが故に (pratisiddhāt) 無爲は許さる (abhivyupagamyate) それ(無爲)を許すが故に有爲は成せらる。一切は相伴へるもの有りを見らる。苦と樂と法と非法と寒熱との如し。有爲と無爲ともそれに同じかるべし。夫故に無爲成せらるゝによりて兩ながら成せらる。無爲は一切に遍在し (sarvatraga) 常 (śāśvata) にして方 (dis) を離るゝものなりと。

〔論主は此に答へて言へり。無爲は〕一方處のみなり (ekadigmatram)

此處に若し我と極微と虚空と時と方等に一切處に遍する性 (sarvagatva) あるときは此に就いて問ふべし。汝等の此「我」は身中一方處を以て住するか否か。我體 (ātmatva) 全て (sarveṇa) 若し一方處によりて〔住する〕ならば、爾時は一方處によりて存在する (vyavasthā) が故に、一方處は又餘他¹¹⁾〔の諸方處〕にてもあらざるべからず。又方處を具するが故に無常なり。何故なれば若し或ものにして方處に於て起る (pravartate) あらんかそれらのものは無常なり。例へば瓶等の如し。若し我體全てを以て身中に住するならば爾時は〔我は〕正しく一切方處に遍在する性 (sarvagatī) たりながら身中に圓滿 (paripūrṇa) するが故に、夫故に一方處量に墮すべし。同様に一切處遍在性は遮せらるゝが故に一切處遍在と極微等なるもの、〔即ち〕常たり、一切處遍在たり又方處を離れたるものが、一方處を具する相に墮す。身は方處を具するが故に、これらのもの(一切處遍在、極微)も方處を具する性 (sapakṣatva) に墮すべし。

又諸常は因より〔成せらるゝ〕なるか、無因より成せらるゝなるか。夫に由て云何になる。兩者共に過失あり。若し因〔所成〕ならば爾時は無常性に墮す。因よりの生なるが故に瓶等の如し。若し無因よりならば爾らば無決定性(anāikāntikatva)に墮すべし。諸無因なるもの(ahetu)は境(visaya)時(kāla)及び自性(svātūpa)の決定すること無きが故なり。又無物性(abhāvavta)に墮すべし。石女子等の如し。若し汝等の語のみによりて成せらるゝも我の〔語によりては爾〕らずとなれば、こゝに別して(visesena)〔それの〕因(hetu)を説かざるべからず。

若し人『因は二種、所作因(kāraṅkahetu)¹⁴⁾と作明因(vyāñīkahetu)となり。その中所作因によりて生せしめらるゝものは常にあらず。瓶等の如し。凡そ或ものゝ住しつゝある相(ūpāhannatva)によりて知らしむると雖も生せしむるに非る時は、彼ものは作明因なり。燈と寶石等の光線の如し。その中所作因によつては無常性となる。〔然るに作明因によりては〕諸不作〔物〕を明作せしむることによりて作明せらるゝことのみなりと雖も生せしめらるゝにはあらず。又生ずるものは凡て常にあらず凡そ異法(vaidharṇya)¹⁵⁾にして、生せず、因によりて作明せしめらるゝのみなるときは、それらものは常なり。夫故にそれより異性相(vaidharṇya)¹⁶⁾の故に已作〔物〕は常にあらず』と言はゞ、爾らば今、¹⁷⁾作られたるものは有性(astīva)なりと見らるゝが故に、而して不作〔物〕(akriyaka)はそれより異性相(vaidharṇya)なるによりて無性(nastīva)となるが故に諸常は〔依るべき〕義なし

(anartha, vyartha)。かくの如くにして有爲と無爲とを捨離する處には我執我所執斷せられ、夫故に涅槃なり。次の説あり。

知は依無くしては起らず、

識滅するに至りて

有の種子滅すべし。

註

1、漢譯の「無爲のために相を作すべし」は前節の註2の終に於て述べたる如き、有爲の三相が無爲を相するに云ふ思想であつて「無爲法は成ぜらるゝが故に無爲法は三相によりて相せらるゝ。所相成立の故に能相亦成立す」この謂であらう。

2、此一文は本文として認められ得る。

3、此一文は西藏譯中に無し。

4、北京ナルタン共原本にては「*na*」のみであるが、エシユケ及びチャンドラダースの兩藏英辭典の示す所に由つて「*do*」を附加する。

5、原本には此句無し。他の場合の例に従ふて添加する。

6、兩版共に原文は單に「*gnas ma bon-te*」があるがそれにては意味不明。必ずや訂正されたる如くにてあるべし。

7、兩版共に原文は *thams-tad* のみであるが、それにては意味通ぜず。前後の文章より考へる時は一方處量に

墮するが故に一切處遍在性が遮せらるゝ、」この意味なるから、附加せる如く訂正せられねばならぬ。

8、次の文章への連絡上、又漢譯が「内言」によりて承ける邊より見れば常の如く「*śūdrā*」は加へらるべきである
9、此一行漢譯に無し。

10、漢譯には極微時方等多くの常法を列舉せない。又その常法の一を破するに漢譯は虚空を以てし西藏譯は我を以てする。それらは只常法の遍在性を示さんとするものであるから我でも虚空でもよい譯である。因みに漢譯百論に於ける五種常法は時、方、虚空、微塵、涅槃にして四百論月稱註に於ては破常品の第三、四偈は我を破する偈であるから月稱註による限り四百論の破常品は百論の「方」に代ふるに「我」を以てするものである。護法釋論に於ては前上の二偈を我を破するものとして特定せず、常法一般に關するものとして居るから護法によれば百論の如く我は破我品にて遮遣せらるゝものを見るのであらう。

11、此一行は漢譯の「應在汝身邊亦在彼身邊」に相應する。

12、註3に示す如く漢譯にては此一段の文ミ前文ミの間に一文存す。尙此諸常法の有因所成無因所成については百論破常品の始めに常法一般を破するその第一問答の答の中にこのそれミ同一内容のものを見出す。

13、此下漢譯は「汝が無因にして常ならば我も亦無因にして無常」ミ云ひ、西藏譯の所述ミ異る。その漢譯所述の論法は先に第三節の論主答言下の註に出づるものと同じ。

14、第五節註15參照。百論破常品の前上註12下に關説した文に引續いて出づる文に相應する。漢譯が *vyājakahetu* を「因」云ふ「了」は「唯識」の識 *prajñā* (知らしむる) を「了別」ミ譯せらるゝことあると同じく今の「了」も翻譯名義集の譯語の如く作明(明らかならしむる)である。

15、此「*vidharmya*」は次に「生ぜず」ミ云ふ形容語のあるより見ればニヤヤコーシヤの此語を解釋して「*avartamāno dharmah*……*abhāvasya samavāyīkāratvatam*; 現に起りてゝあらざる法、非體に一致せしむる相」ミ云

へる意味あるものご解すべきであらう。

16、此「vaikhariya」は同じくニャーヤーコーシヤに「advirodhidharmavattvam; それご相違せる法を具する相」ご解すべきであらう。

17、此下は百論破常品の前上第14下に關説した文の次に出づる文即ち破常品の第三問答の答の下の註釋「汝以作法相違故名不作法」云々に相應する。それよりも簡明に此處の思想を言ひ表はせるものは四百論破常品第四偈

anivyan kriṭakān dṛṣṭvā śāsvato'akṛitako yadi | kriṭakasyāstitān dṛṣṭvā nāsti tenāstu śāsvataḥ ||

見_ニ所作無常、謂_ニ非作常住、既見_ニ無常有_一、應_ニ言_ニ常住無_一。

である。此等の云ふところによりて今漢譯に「現見、非現見」ご云ふ因故の出されたるものは少くごも普通でない。

18、漢譯は敬文體で表はされ、西藏譯は偈形である。西藏譯には偈の第一句が缺けて居るのでないかご思はれる。此引用文は漢譯は此を經中説ご云ひ西藏譯も「gong pa」なるオノリフイックな言葉を以て引用して居るが此ご同内容の説は四百論破邊執品第二五偈中に見らるる。

stid-paḥi sa-bon man-ces-te || yul nams deḥi spyod-yul-lo ||

yul-la bdag med mthoh-na-ni || stid-paḥi sa-bon ḥgag-par ḥgyur ||

識爲_ニ諸有種、境是識所行、見_ニ境無_一我時、諸有種皆滅。

一九

外曰。若有爲法無體相、云何而有實。

內曰。如夢¹⁾。

世諦法皆如夢。夢非實有。又非是無、亦非無因。⁶⁾如世諦法、非有相、非無相、非無因。如似屋宅。若有體相、未作時應見。若言無、不應得見。假梁椽基壁故、而有成用、非是無因。以是故、一切法非是有、非是無、亦非無因。是故如夢。

[hdir smras-pa] ⁽²⁾hdus-byas dnos-po med-pahi-tshe | ⁽³⁾ji-ltar dnos-po hdi rnam dnos-po-ñid
yin-na she-na |

smras-pa | rmi-lam-dan mtshuis-so ||

hdir-ni tha-sñad-las dnos-po rnam-s-kyi dnos-po-ñid rmi-lam-dan mtshuis-so || ji-ltar rmi-lam
yod-ñid-kyi mtshan-ñid-du hgyur-ba ma-yin med-pa-ñid-kyi mtshan-ñid-du hgyur-ba yan ma-yin-la |
rgyu med-pa yan ma-yin-te | de-bshin-du tha-sñad-las khyim (la-)sogs-pa rnam yod-pa-ñid-dol ||
gal-te don-dam-par khyim la-sogs-pa yod pahi mtshan-ñid-du hgyur-na | ⁽⁴⁾rtsib dnos-med-pa yan
dmigs-par hgyur-te yod-pahi-phyir-ro || ci-ste mod-pahi mtshan-ñid-du gyur-na dehi-tshe byas-pa-
na yan mi-dmigs-par hgyur-ro || med-pahi-phyir-ro || ci-ste gñi-ga^{hi} mtshan-ñid-du gyur-na | de-lta-
na byas-pa dan ma-byas-pa gñi-ga yan dmigs-par hgyur-ba-shig-na | gñi-gar dmigs-pa yan med-do ||
rgyu med-pa yan ma-yin-te | ⁽⁵⁾rtsib la-sogs-pa rnam-s-kyis grub-pa-ñid-kyi-phyir-ro || dehi-phyir-na

l̥bras-bu yod-pa ma-yin-shin l̥bras-bu med-pa ma-yin-la | l̥bras-bu yod-pa dan med-pa yan ma-yin-la | rgyu med-pa yan ma-yin-no ||

〔外人は此處に言へり。〕有爲が無法 (abhāva) なるときは云何にして此諸法が物性 (bhāvata) なるかや。

〔論主は此に答へて〕言へり。夢と等し (svapnena samāh)

此處に言説 (vyavahāra) 中の諸法の物性は夢と等し。凡そ夢が有性 (astiva) の相たるにもあらず、無性 (nāstiva) の相たるにもあらず、無因 (ahetu) にもあざざる如く、その如く言説中、家等は有性なり。若し勝義 (paramārtha) 中に家等が有性の相たらんか、〔未だ作られざる〕梁の見られざるもの (asākṣika) も見らるべし。有なるが故なり。若し無性の相たらんか、爾時は作られたる時にも知られざるべし。無なるが故なり。若し兩共の相たらんか、爾らば作 (kṛita) 不作 (akṛita) 共知らるゝならん。而も兩つながら知らるゝこと無し。無因にもあらず、梁等によりて成立せる性なるが故なり。されば果有にもあらず無にもあらず、果有無にもあらず、無因にもあらず。

註

1、此處に本文として見出さるゝ如く「如夢」にて十分なるに卷末に「等如夢」を表はされたる「等」なる餘分の字は尙句を充す爲なのであらう。

2、漢譯及び他の節の例に従ひて加へる。

3、原文は北京ナルタン兩版共「*pa-tai*」であるが漢譯によれば明かに「*pa*」である。

4、原文は「*pa*」であるがそは訂正せる如くであらう。

5、原文は「*pa*」であるが漢譯に「*pa*」云々云へるによりて見れば「*pa*」であらう。

6、此一行に相當すべき漢譯の「如世諦法」云々は、「勝義諦にしては世諦法の如く有にあらす無にあらす」の意
味で、「勝義諦にして」の語を缺けるものである。

7、漢譯の如くにしては語不足である。

二〇

外曰。若一切法如夢、老少中年取瓶時、何故不取毘等⁸⁾。取毘時、何不亦取瓶等。今見取瓶、不取餘物。以名有定故。當知一切法不如夢。

内曰。名非是體¹⁾。

若名是體、如有瓶名、即應便有盛乳酪等用。如世智人言但瓶、空名已有用者、不應復須陶師造作出價市瓶。如身有三名。若男若女非男非女。以身取名則統於三。若以名求名、則三不相攝。是故名體有異。復次如瓶有聲可聞、有色可見、瓶觸亦得。如是則有多瓶。又瓶有口咽底腹。是名非一。復應多瓶。以此觀察、名字虛假、當知無實。如佛所說偈。

世間有假名、相如熱時炎、音聲猶如鼓、世間相如夢。²⁾

hdir smras-pa | gal-te dños-po rnams rmi-lam dan mtshun̄s-pa-ni deñi min̄ bstan-pas dños-po
rnams-las hgañ yañ rtoḡs-par mi-byed-de | hdi-lar bunn-pa ñon-cig ces brjod-pa-na | byis-pa ñam
mkhas-pa yañ ruñ bunn-pa shes-bya-baḥi min̄ ñutis miñ-can bunn-pa-la rtoḡ-par byas-nas bunn-pa
khyer-nas ñon-gi snam-bu-ni ma-yin-te | de-bas-na min̄ bstan-pa-las dños-po yod-dlo she-na |

hdi-la brjod-pa | *min-ni dños-po ma-yin-no* ||

hdir min̄ dños-po ma-yin-te | gal-te min̄ dños-por gyur-na deñi-tshel | bunn-pa shes brjod-pa-ni
yi-ge gn̄is-po de-dag-nid-kyi sbran-rtsi dan̄ chu la-sogs-pa ñdsin-pa dan̄ | ñthun̄-bar byed-par ñgyur-
na | de-lar yañ ma-yin-te | deñi-phyir min̄ gshan-la dños-po gshan-no || gal-te min̄ dños-por
gyur-na-ni mi-mkhas-pa su-shig tshig-tsam-gyis yod-paḥi (-phyir) bunn-pa rdsa-mkhan-las rin-gyis
ño-bar ⁽³⁸⁾ byed | gal-te min̄ dños-por gyur-na-ni deñi-tshel geig-la rtags gsum-mam | bud-med
dan̄ skyes-bu dan̄ ma-nñi rnams h̄dres-par thal-bar ñgyur-ro || cñi-phyir she-na | h̄di-na ⁽³⁹⁾ “dha-dha”
shes brjod-pa-na skyes-bu dan̄ | “ta-ni” shes brjod-pa-na bud-med dan̄ | “ga-ñin-na” shes brjod-
pa-na ma-nñi shes bstan-te | rtags gsum-po h̄di-ni srog-chags dan̄ srog-chags ma-yin-pa thams-cad-
la ñjung-par ñgyur-te | de-bas-na gal-te min̄ dños-por gyur-na | geig-la gsum-du ñgyur-te | deñi-phyir
skyes-bu-la bud-med dan̄ skyes-bu ⁽⁴⁰⁾ dan̄ ma-nin̄-du ñgyur-na de yañ mi-ñdod-de | deñi-phyir min̄

dhos-po ma-yin-te | gāi-gi-phyir miñ-ni rna-bas dan bunn-pa-ni mig la-sogs-pa rnam-s-kyis ldsin-par
byed-do || gal-te yan miñ bunn-par gyur-na deñi-tshe gñata dan kunn-bha dan ka-la-⁽⁶⁾ca shes-bya-
ba la-sogs-pa miñ mañ-bañi-phyir dhos-po mañ-bañid-du ñeyur-te | de-ltar thams-cad-kyis bsal-na
miñ-ni dhos-po ma-yin-no || bcom-ldan-ñdas-kyis |

ñig-rten shes-bya miñ-tsam-ste || miñ dan smig-rgyu dan mtshuis-pañi ||

tshig-tsam tshig-gis ston-pa-ste || rgyud-mañs rñsa-ñia sgra-brñan mtshuis ||

shes gsuns-so || de-bas-na tha-ññad rñi-lam dan mtshuis-so || deñi-phyir dhos-po [yod-pa] ma-
yin-no ||

〔外人は〕此處に言へり。若し諸法夢と等しきものならば、その名が説かるゝ〔も、それ〕によりて
諸法中の何ものをも了知せしめず。何故なればかくの如く瓶を我に與へよと云ふとき、⁽⁸⁾愚者と云はず、賢
者と云はず、瓶と云ふ此名によりて名を有するもの (ñamachara, abhidñeyavat) なる瓶は了知せしめ
らるゝが故に、瓶を持ちて來るも布〔を持ち來る〕にはあらず。夫故に名が説かるゝ處に諸法有り。

〔論主は〕此について言へり、名は物にあらず (ñama na bhāvañ)

此處に名は物にあらず。若し名が物ならんか、爾時は瓶 (ghata) と云ふ時その二字 (gha-ta) によ
りて密と水等を取り、飲用することゝなるべし。而もそは爾らず。夫故に名は異、物も異なり。若

し名が物ならば賢き人は誰にても、語のみを以て〔瓶は現に〕有る故に、瓶を陶器師より價を以て買ふことを作さざるべし。若し名が物ならば、爾時は一處に三相 (tri-ga)、換言せば女、男、非女非男が相雜合することに墮すべし。何故なるか。〔何故なれば〕こゝに dha、dha と云ふとき「男」、⁹⁾ tani と云ふとき「女」、⁹⁾ sahima と云ふとき「非男非女」と説かる。此三相は一切の有命と非命とも起るべし。夫故に若し名が〔實〕物ならんか、一中三となるべく、それよりして男中に女と男と非男非女あらん。而もそは許さるべからず。夫故に名は物にあらず。人は名をば耳によりて瓶をば眼等によりて執るが故なり。若し名が瓶ならんか、爾時は ghaṭa と kumbha と kalasa 云々の名多きが故に物 (bhāva) は多性 (bahutva) となるべし。かくの如く一切によりて遮せらるゝ時 (nivarita) 名は物にあらず。世尊は

世間と云ふは名のみ。名は陽炎と等しき語のみ。語は空なり。堅琴と杖鼓 (mridāṅga) とは反響 (pratisabda) と等し。

と説き給へり。故に世稱 (vyavahāra) は夢と等し。故に物 (bhāva) は〔有るに〕あらず。

註

- 1、註釋の始めの語句も見られないではないが併し西藏譯の示す如く、本文を認めるべきであらう。此に相當すべき卷末の偈に於て吾人は僅かに「相 (bhāva)」の一字を見出すのみなることは先に述べた。

2、漢譯中の引用偈の最後句にして出されてある此句は、西藏譯の意味より推せば引用の偈句ではなくして註釋者の本節の僞の結語である。

3、此句に相當すべき漢譯の方が意味が明瞭であるから、漢譯の意に従つて「[m]」及び「[e]」を假入し、その意に従つて譯する「m」した。

4、原文の「ba」は「bu」を正しむす。

5、原文にては「hdi-ni」であるが文勢よりして「na」があるを自然とする。

6、原文「kum-pa」は「kumbha」なる「m」疑無し。

7、此一節は、その所論の相は異なるも廻諍論初分第九偈及びその註に「若し諸法の自性無くば自性無しこの名も亦無なるべし。「名」所依無くしては名は無なるが故なり……然るに何等の名も無し云ふことは不可能なる故に諸法の自性あり……」なる外難にその意趣同じく、此に對する龍樹の回答は上分第三八、三九（漢譯にては第三六、第三七）の二偈下にあり。所論の相は異なるも云はんとする點又同じ。

8、漢譯にては此句に相當する處に「老少中年」云ふ。愚者即ち「ba」に關係せしめてかゝる譯語の來る機會が思はるゝ。

9、此三語が云何にして男、女、非男非女を顯はすことになるかについて、私は畏友本田義英氏が私の質問に對し教示して下されたその儘を記してその解釋をする。氏によれば先づ「da」は、支持者扶養者の意味より、家族、妻を養ふ者即ち夫、男の義を示すやうになつた。「da」を語根とする「dhatī」の、「da」のみが男を示す爲に密語的に用ひられるやうになつたもので、「dha dha」を繰返されて居るのはそれが密語として用ひられた證據であらう。次に「tan」は語根「tan + i + tan」即ち産むもの、婦人を意味する。終に「sahima」は怖らく梵語の sa sikhina-yaajana（陽根を切斷せるもの）の略稱として saubhina のみを用ひ、それが次第に saubhina-

sahima の訛傳せられ、遂に音便上 sahima となつて、同時に sahima の混用から sahima となつたものでなからうか。由つて此語は陽根を切斷せるもの (sambhina-yañjana) の訛略して sahima [陽根の]切斷せるもの、即ち非男非女であらう。

10、此下は漢譯の「復次如瓶有聲」云々に相當すべきものであるが、漢譯は「瓶の名が瓶の體であれば瓶は聲にても聞くことを得眼にても見ることを得」云々の意味で瓶の名が瓶の體なる敵者の所立を條件的に加へて解釋すべきであらう。

二二

外曰。汝雖種種破法是有、¹⁾若言有法、則壞汝說。若言是無、無何所破。

内曰。²⁾

汝法有體相、我則有所破。若本無體者、則我無所破。說曰

大人平等相	心無有染著	亦無有不染	都無有止住
諸有體相者	有欲及斷欲	³⁾ 成就不壞信	而捨諸邪見
獨除邪見網	衆穢悉滅盡	能棄三毒刺	勤行修此道
善察如是法	深生信敬心	信心求實法	不趣向三有
不取於無有	得證寂滅道 ⁴⁾		

⁵⁾ |dir smras-pa | de bkag-pa gan yin-pa de ci ran-tshin med-pa-slig-gam ljon-te ma-yin |

hon-te ran-bshin dan bcas-pa yin-na | deñi-tshe dam-bcañ-ba ñams-so || ci-ste ran-bshin med-na
deñi-tshe dgag-par bya-bar mi-nus-te | ran-bshin med-pahi phyr-ro she-na |

smras-pa | *bsgrub-par bya-ba dai mtshuis-so* ||

ñdir khyed-kyis dgag-pa gan-yin-pa ñdi brjod- pa | ci yod-pa dan med-pa shes-bya-baḥi dgag-
parbyed-paḥi phyr mi-srid-de | dgag-par bya-ba med-pa-la-ni ñdi ci-shig ḥgegs | dgag-par bya-ba
dan | dgag-par [byed⁶⁰-pa]-dag ḥgegs-pa-po rñams rim-gyis mi-srid-la | cig-car yañ ma-yin-no || ñdi-
lar gal-te dgag-par bya-ba med-na gan-gi dgag-pa yin | de-bshin-du gal-te dgag-pa med-na ji-ltar
dgag-par bya-ba yin-par ḥgyur | de-dag med-na ḥgegs-pa-por ji-ltar ḥgyur | de-dag med-par yañ de
ji-ltar ḥgyur | de-ltar re-shig rim-gyis ma-yin-no || dgag-par bya-ba dan | dgag-pa dan | ḥgegs-pa-po
cig-car yañ yod-pa ma-yin-te | cig-car skye-baḥi ba-lai-gi rva-dag-la-ni phan-tshun dgag-par bya-ba
dan | dgag-pa dan | ḥgegs-pa-po-dag med-do || de-bas-na tshig ñdi bsgrub-par bya-ba dan mtshuis-so ||
de⁶¹-ltar yin dan rten-med-paḥi ñon-moñs-pa rñams rab-tu spoi-ba yin-no || yañ
bdaḡ-ñid-chen-po chags-pa min || chags-bral ma-yin rten med-phyr ||
rten yod-na-ni chags-pa dan || chags-bral ñe-bar skyed-par byed ||
ces gsuñs-so ||

yi-ge brgya-pa shes-bya-baḥi rab-tu-byed-paḥi ḥyrel-pa | slob-dpon ḥphags-pa klu-sgrub-kyi
shal-sna-nas mdsad-pa rdsogs-so ||

dpal kha-cheḥi groi-pyer dpe-med-du bande gshon-ni ḡes-rab-gyis bsgyur-baḥo || slad-kyis
paḡita | amanta dan | lo-tsal-ba grags-ḥbyor ḡes-rab-kyis shu-chen legs-par byas-so ||

〔外人は〕此處に言へり。そんなる遮 (pratisedha) なるものは是れ自性 (svabhāva) 無なるか否か。若し自性を具するならばその時立宗 (prajñā) は害せらる。若し自性無ならば爾時は遮せらるべからず。自性無なるが故なりと。

〔論主は此に答へて〕言へり。所立と等し (sādhyena samah)

こんに汝によりて遮なるものが是れ説かるゝ時、それは有 (sat) なるものを遮するが故なるか、又は無 (asat) なるものを遮するが故なるか、〔俱に〕あり得べからず。遮せらるべきもの無き處に於て此〔遮〕は何ものを遮するか。遮せらるべきもの (pratisedhya) を遮するゝ (pratisedha) と遮する者 (pratisedhi) とは次第を以て (kramena) ならず、同時 (yugapad) にもあらず、何故なれば若し遮せらるべきもの無かつたは何ものゝ遮 (pratisedha) なるか。同じく若し遮無かつたは云何にして遮せらるべきものあるべし。その二無かつたは云何にして遮者たるべき。その二無くして而もとは云何があり得べき。かくの如く且らく次第以てあるにあらず。可遮と遮と遮者とは同時に亦有るにあらず。

俱時に生ずる牛の角には相互に可遮と遮と遮者とは無し。それ故に此語は所立と等し。¹¹⁾

かくの如くにして無依 (anāśraya) なるところに煩惱は斷せらる。又、

大なる心ある者は染れる (rakta) にあらず、

染と離れたるにもあらず、依 (śāśraya) 無きが故なり。

依あるときは染と

離染とを生せしむ

と説かれたり。

百字と云ふ論の註、軌範師聖龍樹造完了。¹²⁾

吉祥なる、迦濕彌羅の Anupamapura に於て、法師童智 (Kumaraprajña) の所譯。後バンデイタ阿

難陀 (Ananda) のロッア、稱福智 (Kiribhūtiprajña) の校訂善造。

註

本節は緒言に於て一言したる如く、諸法自性無しと遮する語も遮せらるゝ諸法と同じく無自性空なりと論じ、その謂は、言説の可能は諸法無自性なる處にありとするものであるから本節は、「若し一切法の自性何處にも有るに非るべきは汝の語も自性無し。〔自性無なる語を以て〕自性を遮すべからず」てふ外人の難問を以て始むる廻諍論、「説者之所説にあるべきは空と云ふべからず若し人云はんか、彼に言ふべし。緣起するところには彼説者之所説の語の三にも自性有るにあらず」てふ偈を以て正しく始めんとする四百論教誡弟子品、及び「外曰。……汝破

一切法相。是破若有。不應言一切法空。以破有故。是破有故。不名破一切法。……内曰。破如可破」なる問答を以て始むる百論の破空品第十とその意趣を同じくするものである。

1、「若言有法」の前に、「破自らが」この意味を加へてみなければ此漢譯文は意味不完全である。

2、本文たるべき句を缺く、卷末の偈句については先に述ぶるが如し。

3、此句以後の漢譯に相當すべきものは西藏譯に見出れず。

4、此句以後の漢譯は先に本文として出したるものである。

5、*de* は *der* があるべきでないか。

6、*dgag-pa* の *pa* を生かせば「*byed-pa*」の附加を要する。併し「*dgag-pa*」にても意味は成立する。

7、此文以後は第二節に屬しつゝもそれは本論全體の歸結を物語るものと見るべきである。

8、一切法の自性を遮す爲に遮にも自性ありとするならばその遮は一切諸法中に含まるべきものであるから一切諸法の自性無しとの立許は害せらるゝこの意味である。百論破空品に「是破若有不應言一切法空」云へるものそれであり、廻諍論初分第二偈の初二句に「若し彼語自性を具すならば汝の先の立宗破壊せらる」云へるもの亦それである。

9、此行以後の漢譯は缺く。こゝに示さるゝ可遮、遮、遮者次第を以ての伺察(*vicāra*)は、廻諍論初分第二偈に答ふる上分第四九偈(漢譯第四八偈)に出づる處である。

10、作者(*Kārti*)作(*karana*)業(*kamma*)は相依相待して成立し、その何れもが他の二無くしては成立し得ざるを示す一般の立場に於て述べる爲に、代名詞によりて示されたものと思ふ。

11、諸法無自性なりと遮する語も、遮せらるゝ法と等しく無自性なりと示す。前々9中と言ふ廻諍論上分第四九偈にもこれに相當する語が見出される。

12、本論の著者については緒言参照。——完——

本稿を草するに當り所謂百字論本文の梵語還元については畏友本田義英氏より懇切なる注意を受けたる點多く、第二〇節註りに述べたるところと共に茲に深謝の意を表します。

(昭和五年三月十六日)